

# 1. 記念碑・顕彰碑など ～先人の労苦を偲ぶ～



岩見沢神社 巖見澤紀碑

入植・開拓・発展の歩み

# (1). 市街中心地域 西

## 西条丁目地区

岩見沢神社境内

岩見沢市指定文化財

### 巖見澤紀碑

石黒長平氏が父忠三の体験した岩見沢開拓の苦勞を後世の人に伝えようとして建立したもので、岩見沢の地名の由来からはじまり、当時の開拓のもようが書かれています。

岩見沢市教育委員会

明治三十八年一月一日 石黒長平 建立

昭和四十三年十一月三日 岩見沢市有形文化財指定



巖見澤記 仙臺處士 岡千仞撰文 正三位男爵 永山武四郎題額  
巖見澤浴澤之輔稱開拓使開幌内炭山十數里間莽蒼深林四絶人煙明治十  
一年創造道路執役丁卒結廬舍就澗流而浴因稱浴澤島一番地今尚在遺跡  
十五年運炭鐵道成此地為停車場浴訓由阿美與岩見相近故曰岩見澤自十  
七年至十九年官移鳥取山口諸縣土族二百七十七戶既而移民四集林澤一  
變為田畝置戶長理村務東南界幌内炭山夕張川西北界千歲石狩二川廣袤  
七八里為一大村後分置栗澤幌向北村數村二十一年官舉炭坑鐵道諸業付  
村田提尋屬炭礦鐵道會社二十四年移停車場於南六番地二十五年室蘭空  
知太間軌道接續以地當要衝街衢縱橫店鋪駢列生色日旺二十九年市街罹  
災此歲郡衙新置管空知夕張樺戸雨龍上川五郡明年改郡衙稱支廳興鄉祠  
分祀圓山神社三十一年洪水官賑貧窮修道路浚溝渠民不以爲艱焉二十三  
年敷自治制至此戶數二千三百戶民口一萬一千口耕地七千餘町步榛莽原  
野不出二十年致此殿賑雖賴其他要衝瀛車四通制度得宜抑亦移住諸人勵  
精服業之所致後營生斯地者不知其所由而可哉邑族石黒忠三觴余其雲煙  
閣示即景和歌且請記此事乃以歌意撰銘曰  
巖見之澤 役夫所浴 瀛車一開 軌道四達 曾幾何時  
蔚爲盛邑 巍然高衢 爲雲煙閣 殷殷日夕 誰知其昔  
明治三十六年三月 勅選議員錦雞祇侯正四位勲三等金井之恭書

## 岩見沢神社境内

### 雲煙閣碑

#### 碑文

石狩国南る岩見澤のに飛橋里業の  
 寿ゝ身行くさまを見んと亭建堂る  
 以盤美さは 雲にた連そう

#### 安散煙

丹幾者布佐とと な麗類 御代閑那

#### 訳文

石狩なる岩見澤の にひばりわざの  
 すゝみゆくさまをみんとて 堂を建てり  
 いわみさは 雲にたれそう

あさけむり

にぎはふさとと

なれる みよかな



撰文	石黒 多々美
書者	東宮侍講 本居豊穎
彫刻	水崎 礪川
題額	東宮侍講本居豊穎
建立年月日	明治三十五年壬寅九月
建立者	石黒 長平

## 岩見沢神社境内

### 岩見沢神社創祀百年記念碑

#### 創祀百年

#### 碑文

明治十七・十八年山口・鳥取外十県の土族二百七十七戸千五百三人が入植岩見沢開拓の鋤をふるい、翌十九年元町畑一番地に小祠を建立初の秋祭りを斎行したと伝う。爾来先輩氏子祭り承け継ぎ大火のため明治三十年現在地に遷り本年創祀百年を迎う。ここに奉賛会を結成し氏子の総力を挙げ記念事業の社殿・社務所の改築をすすめ、今般次の世代に引き継ぐ昭和大造営が完工せしことを慶びこの碑を建つ。

昭和六十一年八月五日

奉祝百年大祭齋行の日

岩見沢神社創祀百年記念奉賛会

宮司 植田 昇 書



## 岩見沢神社境内

### 吟魂碑

吟声響くところ親和あり

吟詠道の発展に願いをこめて

この碑は昭和三十四年十二月岩見沢詩吟会創立より発展的に昭和五十三年三月恵山流日本吟道と改称し、創立満二十周年を記念し詩歌を研修した同志の魂を後世に残し未来の夢を碑に託せんと会員総意のもとに建立するのであります

昭和五十三年六月二十八日





## 岩見沢神社境内

### 道標石灯籠

#### 『旧夕張道路碑』

##### 表 面

従是夕張へ拾壹里三十二丁

##### 裏 面

開村九十五年を機としてこの碑を建つ

昭和五十三年十月六日

##### 右横面

明治二十二年道庁技師坂千太郎一行が、こゝより上志文渡場、雨煙別、桜山、継立、二岐を経て夕張の奥地に至った。この時の駄馬路が岩見沢、夕張間の道路となった。

国 兼 孝 治 書



### 明治神宮御造営奉仕記念碑

空知聯合青年団員六十余名が、明治神宮御造営の奉仕に従事した記念として建立した

#### 碑 文

明治神宮御造営ノ挙アルヤ我ガ空知聯合青年団ハ優良団員六十余名ヲ選抜シ 大正九年九月十六日ヨリ十日間淨役ニ奉仕ス 其ノ氏名左ノ如シ

引率者 空知聯合青年団長 馬場義也

同幹事 広田竹蔵 高橋英造

奉仕者 岩見澤町 西川直次郎 以下六十余名 (氏名略)

代参者 空知聯合青年団幹事 高井幸次郎

岩見澤青年団 西川直次郎

栗澤青年団 菅原 健蔵

題 額 明治神宮御造営奉仕記念 内務大臣 床次竹次郎 書 大正十一年四月 建立



### 御慶事記念碑

#### 『大正天皇御成婚記念』



### 頌徳碑

#### 『頌徳』



北海土地改良区敷地内  
国営総合かんがい排水事業  
美唄地区竣工記念碑

『 空知乃大地 』

美唄地区国営土地改良事業竣工

本事業は、石狩川流域総合開発事業計画の一環として建設された幾春別桂沢ダム及び空知川金山ダムにより新規に発生する水量を用水源とし、戦後畑作経営の不振による水稲への転換と経営規模の拡大更に、既成水田の用水不足



に悩む地域内農家の水利用の合理化を図るべく、用水施設の新設、改良により地域農業の近代化と生産性の向上、経営の安定を図る一大国営灌漑事業である。昭和三十二年十月三十日、高遠と周密なる大事業の計画は、時の赤城宗徳農林大臣によって公告され、中央空知五市三町一村に跨る二二、一一一 ha の受益地と七九五六戸の農家組合員の用水確保と、併せて農業水利体系の整備と用水慣行の改善を目的に着工を見たもので、時に計画総事業費六十七億七千万円であった。事業の推進は、北海、岩見沢、三笠、金子、志文、金志、大正池の各土地改良区と、受益市町村としての岩見沢市、美唄市、北村他関係市町村との協議会を結成し、強靱なる体制のもとに、札幌開発建設部岩見沢農業事務所とが、渾然一体となって長期にわたる歴大なる事業を推進した。遠く金山ダムからの発生水は、上川、空知の地に流れ下り、赤平北海頭首工で取水、北海幹線により延長八二 km 南幌町に至る間流下し、其の間、桂沢ダムからの流水は新設市来知幹線にて北海幹線に合流せしめ補給され一方、川向頭首工よりは、岩見沢土地改良区補給水として直接取水された。更に丘陵地帯に対しての二段揚水機による補給を実現し、地域新規開田への用水確保がなされたもので、当然主要取水施設を始め、在来主要支幹線用水路等は、大幅な改修計画がなされ近代施設が造成されたのである。然しながら、当初計画にもとづいて着工以来二〇余年を経過し、この間社会経済の変遷に伴い農業の内部構造的にも大きく変貌、都市近郊の宅地化、工業用地等による農業地の潰廃に伴う受益地の減と、更に必用な施設の新規取込、農業の進展と社会的要請に即応した部分的な修正補備による工事内容をもって事業完了を前に変更計画の樹立をなし、これが受益関係者の理解のもとに其の手続きを全く終わることが出来たのである。茲に画期的な国営美唄地区土地改良事業の完全なる竣工を見たのである。総受益一九、九五九 ha の地域が、基幹水利態勢の整備充実により、遠来の願いが解消、見事実現したことは将来の維持管理費の軽減はもとより、農業経営安定の基盤がもたらされたことは、地域農業史に永く残るものと信ずる。この世紀の事業を語るとき、衆議院議員、小平忠氏の名を逸することは出来ない。氏は着工以来毎年度予算折衝等事業推進の上に長きにわたって地域農業者の真の理解者として強力なる政治手腕を発揮された。其の御功績と更に、期成会の中核としてし全力を傾注された故森下友平、故桑村三吾、塚本一郎、出口竹松の諸氏の御功績を讃え、永遠に銘記するものである。又着工以来先輩諸氏のたゆまぬ御指導御厚配に対し衷心から敬意を表し、この事業の竣工を契機として、更に農業基盤の近代化への発展を心から願うものである。

昭和五十五年五月

事業の概要

- 一、地 域 赤平市、砂川市、奈井江町、美唄市、岩見沢市、三笠市、北村、栗沢町、南幌町
- 二、受益面積 一九、九五九ヘクタール
- 三、戸 数 四、五七三戸



- 四、主要工事 頭首工 北海、川向、市来知  
揚水機場 由良第一第二、川向第三  
用水路 北海幹線用水路他一八条、総延長一五九、五五〇米
- 五、工 期 昭和三十二年度～昭和五十四年度
- 六、事業費 一六、八七三、〇〇〇千圓
- 七、効 用 増加生産量（米換算）三〇、三〇〇屯

### 受益団体並に代表者

北海土地改良区理事長	湯 浅 外 吉	砂川市長	山 口 正 直
岩見沢土地改良区理事長	深 田 盛 吉	奈井江町長	萬 敏 夫
三笠土地改良区理事長	岩 谷 達 樹	美 唄 市長	澤 田 孝 夫
金子土地改良区理事長	波 田 野 健 次	岩見沢市長	国 兼 孝 治
志文土地改良区理事長	平 田 政 一	三 笠 市長	杉 淵 徳 治
金志土地改良区理事長	近 藤 隆	北 村 長	小 木 曾 法
大正池水利組合長	中 原 末 吉	栗 沢 町 長	中 山 稔
赤平市長	佐々木 肇	南 幌 町 長	竹 内 正

### 北海土地改良区敷地内

#### 『記念碑』

農林大臣 廣川弘禪 題額

#### 碑 文

高遠の希望と周密の用意並に強靱の忍耐と親和の協同とが渾然一体となって大事は始めてその功を奏する吾北海土地改良區が今日ある所以のものは全く是に存する大正十一年當時は歴大な規模に於て東洋一と称せられた北海土功組合が誕生するに到る迄の歴史は実に波瀾万丈であった初め明治の末葉渺茫たる曠野を美田化せんとの先覺者の夢が描かれ尔来不屈不撓の努力は遂に北海道廳の認むるところとなり大正三年基本調査を行い石狩川左岸灌漑溝と称し本事業計画の濫觴をなした然るに前年勃発せる欧州大戦の余波による國內經濟の激変等に禍いされて一頓挫を來し切齒扼腕機の到るを待つ已むなきに至った後数年世界情勢は変轉し國の農業政策は国庫補助の下に大に水田開発の勧誘をなすに及んだ是に於て關係六ヶ町村より十二名の發起人を選出し大正十一年二月創立總會を経て組合設立を申請同年六月十日これが認可と共に田中空知支廳長が組合長に指定された北海道廳は十二年八月灌漑面積一万一千町歩総工費六百七十万円の事業計画を組合に交付し組合は友成仲技師を聘し十三年十二月工を起し数次設計変更の末灌漑面積空知



川水系一万町歩石狩川水系千百町歩合計一万一千一百町歩総工費七百五十八万二千五百円に増額内三百二十八万六千九百円を國庫補助に仰ぎ他は大藏省預金部日本勸業銀行北海道拓殖銀行等に起債し五年四ヶ月の歳月を費し昭和四年三月竣功茲に多年の要望完く成り穰々たる黄雲遠く天に連るの盛觀を見るに至った後昭和八年赤平外六地區に揚水機を設け七百四十四町歩十四年茶志内百五十町歩十七年鶴沼百町歩其他隣接地區を編入灌漑面積一万二千六百町歩に擴張した然るに一

方非常時局に際会し炭礦開発大工場建設等による地区の蠶食があり戦後の農地改革の齎した耕地細分化により地区整理の必要に迫られ更に隣接地區の吸収不良地区の整理を行い昭和二十六年五月六日の總會を経て灌漑面積を一万二千五百四十六町九反五畝歩とする地区変更と土地改良法に據る土地改良區への組織変更を申請七月二十八日認可茲に北海土地改良區として新発足を見た実に設立以来三十年その間幾多の苦難を克服し今や十ヶ市町村に跨る地区を擁し当初二千餘の組合員は四千八百餘となりその堅き結束の下二十五万石の生産を揚げ北海道の米産に重きをなすに至った茲に組織変更を記念し碑石を建立しその沿革の一端を録し先人の偉業を永く後昆に傳えんと共に本區永遠の隆昌を希うものである

昭和二十七年八月 日本学士院會員北海道大学名誉教授従三位勲一等農學博士

伊藤 誠哉 撰文

阿部 海秋 書丹

石井敬三郎 謹刻

## 北海土地改良區敷地内

### 完工記念碑 『 淬 』

本地区の農業用施設は「国営総合かんがい排水事業美唄地区」等により整備されたが歳月とともに老朽化が進みその機能も低下したため昭和54年より「国営かんがい排水事業空知中央地区」として各施設の整備が進められ以来30年の歳月を経てこの度完工を見るに至り岩見沢市ほか4市2町1村27,000ha余に及ぶ広大な地域の農業用水の安定確保と生産性の向上が図られることとなった

ここに地域開発の歴史を思い 更なる農業農村の振興と発展を願い 記念碑を建立する

平成21年6月23日

国営空知中央地区

土地改良事業推進期成会



## 北海土地改良區庁舎内

### 友成仲君之像

赤平市から南幌町まで80kmに及ぶ日本一の長大水路「北海かんがい溝（現北海幹線用水路）」の設計施工を指導し、当時全国的に高く評価された農業土木の第一人者。

1857（安政4）年江戸牛込鷹匠町にて玉葉奉行の四男として出生。工部大学校（現東京大学工学部）卒業、農商務省・内務省等を経て退官し、晩年を北海道のかんがい事業に心血を注ぐ。1912（明治45）年より深川・空知両土功組合（現在の土地改良区）からの相次ぐ招へいに続き、1923（大正12）年北海土功組合の懇請に応え着任。翌年12月岩見沢町など7町村による「国づくり」発想で計画された北海かんがい溝工事に着手し、1929





(昭和4)年4月総工事費758万円の巨費を投じた大事業を、4年4カ月の驚くべき短期間で完成させる。この偉業から僅か1年10カ月後の1931(昭和6)年2月郷里の東京にて75歳の生涯を閉じた。北海幹線水路は、空知地域の水田農業振興を支え、土木技術が蓄積された歴史的にも重要な施設として、2004(平成16)年10月「次の世代に引き継ぎたい大切な宝物～北海道遺産～」に選定された。

昭和8年7月水源地に「友成仲君之像」を建立、戦時中銅像を供出、昭和24年11月再建、昭和28年庁舎前庭に移設する、平成17年新庁舎落成を機に前庭より庁舎内に移設

#### 碑文

君ハ安政四年江戸ニ生レ昭和六年七十五歳ヲ以テ東京ニ逝ク明治十八年工部大学校ヲ卒ヘ職ヲ府県鉄道庁内務省等ニ奉セリ後年専ラ北海道灌漑事業ニカヲ尽クシ深川空知北海土功組合ノ事業皆君ガ経営スル所ニ係リ其成績優越実ニ斯界ノ模範タリ茲ニ同志知友胥謀リ地ヲ晩年心血ヲ濺キタル跡トシ銅像ヲ建設シ其ノ業績ヲ永年ニ伝フ 昭和八年七月

コノ像ハ先年供出サレタルニヨリ有志相謀リ同ジ原型作者ニ依嘱再建ス 昭和二十四年十一月  
銅像彫刻者 畑 正吉

#### はぎぞの緑地

#### 岩見沢市水道創設80周年記念

#### 『うるおい』

このモニュメントは三つの柱で水のきよらかさゆたかさやすらかさを表徴し、調和ある発展を表現したものである

昭和63年10月7日 建立  
岩見沢市長 国兼孝治  
協賛 岩見沢水道協会



#### 中央公園

#### 空知青年修練之碑

夫れ、空知教育会が堅実なる農村青年の育成を目ざして長期農事講習会を開設せるは実に大正六年一月に遡る。大正十一年、時の北海道庁官尾瞬次長官の指導により範を、デンマークの国民高等学校にとって、空知高等国民学校を開校せる。その後、時勢の推移と学制改革により校名も空知青年学級・空知青年修練学校・学芸大学青年学級と改めるも、有為の青年知徳修練の道場たることは一貫せり、修は学ぶなり、練は鍛え磨くなり。切磋琢磨して徳性を磨き学術技能を研鑽したる卒業生、凡そ半世紀に実に二千二百四十余名に及ぶ。皆、地域農業実務者・農村指導者としての活躍、正に農業王国空知開発の一大推進力というべし。





小泉浩一郎先生は、専任教諭としての就任の昭和二年から学校閉鎖まで三十年卓越せる識見と豊かな人生観に基づき、心血を注いで学校運営と訓育に当らる。生徒塾舎を創設、畦畔指導を案出し、質実剛健と勤儉治産を校訓とする独自の校風を樹つ。戦後、設立者空知教育会解散、学校存続の危機に臨むや、卒業生決起して、同窓会立の学校として小泉先生を校長に迎う。同窓生の母校愛・師弟啓慕の発露というべし。かくて、生涯を農村青年の教育に捧げた功勞により道知事は開拓功勞を、国よりは従七位勲六等瑞宝章を授与せられたる宣なるかな。茲に、同窓生一同、誇り高き母校の歴史と、慈父の如き小泉浩一郎先生の功を顕彰し併せて温故知新、難局に直面する農村を擔う有為の青年を檄して記念の碑を建つ。題して空知青年修練之碑と為す

平成五年七月吉日

撰文 空知青年修練之碑建設期成会  
空知青年修練之碑建設期成会長  
岩見沢市名誉市民 國兼孝治

## はぎぞの緑地

### 『大地』

岩見沢市開基90年  
市制施行30周年記念

昭和48年8月製作

製作者 道展会員 高橋 昭一



## 総合公園地区

### 緑地公園

### 交響詩岩見沢の碑

#### 碑文

交響詩岩見沢は昭和四十八年に「岩見沢市開基九十年・市制施行三十周年」を祝って郷土が敬愛する詩人加藤愛夫先生により作詩され、岩見沢文化連盟を通して岩見沢市に贈られました。その後北海道大学交響楽団指揮者川越守先生に作曲い

ただき、昭和四十九年十一月二日盛大に披露演奏されてから、多くの市民に愛唱されております。しあわせ多い未来への夢と希望をうたいあげたこの詩が、香り高い文化を求める市民の心の支えとなり、末永く親しまれることを願ってこの碑を建立しました。建立にあたっては、市民多数の協力と市の援助をいただき、これを岩見沢市に寄贈したものです。

昭和五十二年六月二十五日

交響詩岩見沢の碑建立期成会

碑文 加藤 愛夫 書



## 東山公園

### 『誰だ 花園を荒らす者は』

#### 碑のことば

中村武羅夫は明治十九年十月四日岩見沢市東町九番地にて父親禎次母ヨシエの長男に生れ、二十二才の時上京して小栗風葉の門に入る。後新潮社に入社新潮編集長となり、多くの小説論集を書きまた不同調を主宰し文壇の領袖として文学活動を続け、日本文学の発展に貢献された。終始荒海を愛し湘州辻堂海岸に居住されていたが昭和二十四年五月十二日自宅にて没した。ここに業績を讃え有志相はかり碑を建立して永く顕彰する。

昭和四十四年五月十三日

中村武羅夫文学碑建立期成会長 川村 芳次



## 鳩が丘記念緑地

### 百年記念塔

#### 百年記念塔緑地の概要

平成5年、岩見沢市は開基110年、市制施行50周年を迎え、この記念事業として水と緑と文化のプロムナードが展開されました。そのひとつアートトライアングル構想の一拠点で、鳩が丘記念緑地として整備されました。この緑地では、高さ15メートルの記念モニュメント「和を捧ぐ」の塔が目を引きます。岩見沢の風物詩（ドカ雪まつり、あやめまつり、ふるさと百餅まつり等）を透かし彫り風に表現し、夜間はライトアップにより、黒と朱色のシルエットが浮かび上がるランドマークとなります。これが記念緑地でのシンボルとなっています。周囲にはレンガと御影石を使って遺跡風回廊とし、また一角をゲイトシティスクエアとし、姉妹都市ポカテロ市との交流を記念した手作りレンガを使用しています。



## 並木町地区

### 岩見沢農業高校敷地内

#### 日本庭園創造の地 『実践』

この地は、かつて旧校舎の生徒玄関前で、雑草の茂る荒地であった。昭和四十四年定時制課程の農業実習による自発学習の場として、佐藤富次先生の設計指導にて日本庭園造りに取り組む。以後、後輩の生徒と指導する先生の流汗労苦は幾年と続き、ついに美庭と成る。昭和五十七年利根別川改修工事により、残念にも庭園は





消失したが、農神の庭として再現された。母校を愛し、勤労と学習に励みながら 環境美化に取り組んだ仲間の心情を偲び、庭園造成実践の経緯を学習の糧として役立てられ、明日を担う若人の更なる飛躍を願いこの碑を建てる。

平成九年十月十九日

建 立 定時制第二十期卒業生一同

題字筆 学校長 戸野塚 征志郎

碑文筆 藤 井 重 人



## 岩見沢農業高校敷地内

### 原 正市氏之像

原正市氏は、一九一七年八月二八日岩見沢市に生まれ、北海道庁立空知農業学校、北海道帝国大学に学び、北海道農業試験場岩見沢水稲試験地主任、北海道農務部主席専門技術員、北海道農業協同組合中央会審査役等を歴任、一九八二年以降ボランティア活動で北海道黒竜江省科学技術交流協会の派遣により、黒竜江省を皮切りに水稲畑苗移植栽培を基調とした栽培技術の移転に尽力され、その技術が全中国に普及し、中国の稲作発展に大きく寄与された。この度、中国政府は氏の胸像を作成し、長年に亘る稲作技術協力の功績を顕彰された。このことは、郷土の人々にとって誠に慶ばしく誇りとなるものである。氏の荣誉を称えると共に、日本と中国の交流の大きな掛橋となったことを後世に伝えるため有志相はかりここに建立した。



岩見沢市長 能 勢 邦 之

(裏面)

一九九六年八月二八日

日中農業技術交流岩見沢協議会  
原 正市氏胸像建立実行委員会

建立

## 緑が丘地区

緑が丘1 八大龍王境内

### 寶物殿



### 大正天皇御衣奉安所碑





## 緑が丘1 澤宅敷地内

### 遺徳洽郷 澤昇平翁頌徳碑

#### 碑文

翁諱澤昇平氏不詳其出自世為加賀大聖寺庄豪姓慶長元和之間有八郎兵衛者從藩主溝口侯移封轉從越後壠葭封疆汗邪之地有著蹟翁其十四世孫也以慶応三年十二月十二日生於水原幼而雋異個償有大志夙欲恢張祖先遺緒明治三十一年決意蝦夷地開拓卜居岩見澤一號澤会邸政大素辭任助役多所釐革三十六年推村會議員高輪卓議每屈座人三十八年造明治池四十五年官欲開放利根別林於民間翁以為不可日夜奔走事遂止繼裁設定保安林雖旱水源不涸渴人服其先見大正二年起大正池堀穿工拮据經營捐私財未嘗請官支援宿老田中五左衛門岡田勲六二氏援之五年成昭和二年町立病院創設実係翁首唱努力北海土功組合創業也以理事助組合長致今日戊九年五月得病八月二十五日歿翁為人偉軀眼光射人而温藉能容兒童走卒親而敬之其論時務指陳利弊無所忌權貴士亦畏而敬之平生親書煮茗温酒会邑人交膝談笑人目以酒伯今茲昭和甲申邑人胥謀欲建碑欣其遺徳思慕之厚亦可見也

昭和十九年十月

海老名 襄 撰



## 大正池堰堤下

### 東山自然公園発祥記念碑

#### 碑文

二翁を称える献詩

ときに自然は 人間の意志を超える しかし  
人間は自然の上に立っておのれの事業を完遂する  
その人 澤昇平翁の霊はこの満々たる貯水の上に豊かに眠っている  
翁の志を継ぐ人 八郎治氏 父子二代の心血は注いで 一望みどりのさわやかな美田をなしている  
この水をからすことなきために原生林に加えて鬱蒼たる二代の愛林思想は  
いまや四時を色どる遊歩の憩いとなり山谷にかがやく水郷をいだいていたずらに鳴禽の喉をいざなっている  
現代の人 ここに尽きる いっさい鬱情をはらってしづかに拓魂の歴史を踏みやれば  
野鴨の羽搏ききびしく 宝石の水面をきって飛び立つ

永遠の方へ

昭和三十六年十月

岩見沢市長 川村 芳次 書



あやめ公園  
北海道文化財百選  
岩見沢の緋どじょう



利根別原生林  
ウォーキングセンター地先  
川原長藏記念碑



## (2). 市街中心地域 東 東条丁目地区

水明公園



水明公園 水時計



### 水明公園の水時計

この時計は、奈良県明日村水落遺跡で発見された飛鳥時代7世紀中頃に天智天皇が造ったといわれる日本最古の漏刻水時計を基にして、水の流れを利用した水時計です。このしくみは、水を最上段の水槽に入れ、オーバーフローで水を調整して、次の水槽に一定量で流し込み、これをさらに正確な水の流れを保つために3～4段目の水槽に送り込みます。こうして水がより正確な流れで最後の水槽にたまることによって、水面に浮く目盛板が時を刻みます。この目盛は10分刻みで、30分ごとに満水となって、落水する水の重さがピストンに連動して文字盤の針を1刻み進め、2刻みで1時間を示すこととなります。

この水時計は、岩見沢市開基100年市制施行40周年記念事業として、岩見沢ライオンズクラブの寄附により製作したものです。

昭和57年7月24日

国兼 孝治



## 岩見沢消防署敷地内

### 巖見澤消防組創立記念碑 『義 俠』

歴代組頭

初代、五代、七代	山口由太郎	三代	小町芳兵衛
二代	武田才松	四代、六代、八代	河原吉太郎
組 頭	河原吉太郎	一部長	宇佐美金吾
		二部長	浅川 政太
組 頭	深見松太郎	第一部長	松井 政吉
第二部長	鈴木 雅躬	第三部長	伊丹亀次郎
第四部長	寺江次郎吉	第五部長	伊藤吉次郎
第六部長	石塚 仁吉	特科部長	田村 直吉

公設消防創立を記念し、当初の労苦を回顧し消防の功績

を永く後世に伝えるため鳩が丘の地に岩見沢消防記念碑を建設する

明治三十七年四月二十日 建立

昭和七年五月十四日 市庁舎前に移設

平成九年七月六日 消防庁舎前に移設 六条東一丁目



## 岩見沢神社大鳥居前 上水道記念碑

碑 文

惟者 岩見澤町之地也 低濕而無天餘之浄水居民希求  
水道敷設者久焉憾當時民力微而不堪其重擔也 然先覺鑑  
本町将来之長計拮据經營 竟以完成矣 即明治三十九年  
七月起工同四十一年十月竣成大正十四年九月更加補修後  
又擴張 昭和十一年三月全竣焉 嗚呼其着眼之明達經  
營之雄深可謂偉且大矣 余承任本町長者三十餘年馳想今  
昔感不能不禁乃畧敘如此

昭和十六年十月

岩見澤町長勲五等 高柳 廣 蔵



## 岩見沢小学校敷地内

### 侍従御差遣記念碑

碑 文

昭和十一年十月三日 教育御奨励ノ思召ヲ以テ御使小出侍  
従ヲ御差遣アラセラル 仍テ碑ヲ建テ 永ク之ヲ記念ス

昭和十七年十一月三日

建立者發起人 保護者会寄附による

撰文書者 空知支庁長 高尾 善 次

書 者 北海道帝国大学総長 今 裕





## 南小学校敷地内

### 皇太子殿下御誕生記念碑

#### 『天行健也』

碑文

皇太子殿下御誕生記念 昭和九年八月建之  
建立者発起人 児童参拝団



## みなみ公園

### 蒸気機関車 (D 5 1 4 7)

昭和14年製造 函館・室蘭・根室本線  
幌内・万字線等で昭和48年まで使用



### 蒸気機関車 (C 5 7 1 4 4)

昭和15年製造  
昭和51年まで室蘭本線で使用



## 鳩が丘地区

### 岩見沢市役所敷地内 高柳廣蔵翁像

碑文

高柳廣蔵翁は慶應二年十二月十三日群馬縣佐波郡豊受村に生る明治二十八年七月北邊開拓の雄團を懐き郷里の團體を率いて市内毛陽に來住二百町歩の開墾に従事す 明治三十四年以來三十九年の永きに亘り村長町長市長として自治行政に盡瘁し昭和十四年十二月勲五等に叙せら同十九年十一月自治顕功章を受く 昭和二十二年二月十四日八十歳を一期として逝去さる 我が岩見澤市今日の繁榮は半世紀に渉る翁の献身的な努力の賜と稱す可く其の功績は郷土史上不滅の光を放つものである 開基七十周年市制十周年を迎えるに當り翁の遺徳を忍び市民相謀りて顕彰會を設立し此處に銅像を建立した次第である

昭和二十八年八月七日



高柳廣蔵翁顕彰會長 岩見澤市長 山本市英

## 東町地区

### 東駐在所地先

#### 幌内線記念之碑

##### 碑文

明治15年11月、幌内で発掘された良質の石炭を手宮港に輸送するため、手宮・幌内間を運行する幌内線が開通し、北海道の鉄道の歴史が始まった。

近代国家の夜明けとともに石炭需要は高まり、幾春別・弥生・奔別などの炭鉱が開鉱され、幌内線は北海道の鉄道の動脈としての役割を果たした。

昭和30年代、世界のエネルギー革命により燃料の主役が石炭から石油へ代わるとともに、周辺の炭鉱も後退を余儀なくされ、石炭輸送の鉄道も衰退の一途をたどることとなり、昭和62年7月12日、さよなら列車の運行を最後に幌内線はその使命を終えた。北海道の鉄道発祥を後世に伝えるため、幌内線栄町駅跡地に建つ

平成18年11月 建立 岩見沢市



### 東神社境内

#### 開町五十年記念石柱

紀元弍千五百九十三年

陸軍中將 新井 亀太郎 書



### 東神社境内

#### 開拓記念碑 『記念之碑』

##### 碑文

鳥取山口外十県士族による開拓の偉業諸工事に貢献せる土木関係者を讃える記念の碑が明治三十年東二番地に建立をせられたが数次の水害により倒壊埋没せるを発掘開基七十年記念に当り之を移転再建す

昭和二十八年八月

岩見沢市長 山本市英





## 東神社境内

### 文豪 中村武羅夫出生之地石柱

明治十九年十月四日生（於東九番地五号）  
昭和二十四年五月十三日没（於藤沢市辻堂）  
昭和四十四年五月十三日

中村武羅夫文学碑建立期成会建之  
岩見沢市長 川村 芳次



### 入徳公園 開拓記念碑

岩見沢市は明治十七、八年の両年に亘り鳥取、山口県などの士族二百七十七戸の集団移住によって開拓されて以来空知地域の中心都市として発展してきております。この東の地域には、半数をこえる人達が入植し困苦と斗い今日まで岩見沢市の繁栄に大きな役割をはたしてきました。この碑は、岩見沢市開基百年を迎えるにあたり記念事業として、ゆかりのある人々の寄附により建立したものです。

昭和五十八年七月十日

岩見沢市長 国兼 孝治



## 三笠市岡山地区

### 峰岡地区 旧土取り場地先

#### 北海土地改良区岡山支線組合

#### 創立三十周年記念碑

##### 碑文

遠大にして周到緻密な先覚者の企画と而して彼らの不撓の努力により昭和二年秋岩見沢ほか六町村一万余町歩に造田灌漑せんとする北海土功組合大幹線溝路八十数軒の竣功当に成らんとしこれに付随する支派線の掘鑿と造田はそれぞれ地区毎の責任に於いて遂行すべきことを要請せらる即ち昭和三年三月十一日岩見沢の岡山峰延及び大願の一部三笠の岡山にわたる七百余町歩人数百余名は打って一丸となって岡山支線組合を結成し小林篤一氏を組合長に推し副組合長に金内梅松氏を専任理事に大坪秀雄氏を挙げ以って創業のことに当る先ず溝路工作物の設計を川向土功組合伊藤正男技師に囑し施工は菊谷組に依って全年十二月着工雪中の突貫工事を以って翌年完成五月二十三日劃期的な通水に歓声を挙ぐるに至るときに溝路延長五十数軒工作物の数八十余工事請負額壹万参千五百余円なり造田に於ては三





ヶ年に亘る年次計画を樹立初二年度造田者は三年目造田者の費用を負担するの約定を以て着手したが理事者の努力と関係者の旺盛な熱意は僅々二年を以て完了を見るに至る尔来この組合は小林組合長を中心に役員組合員一丸となって拮据経営今日に見る靄々たる人情と一望穰々の美田を形成するに至ったがここに特記しおきたきは草創すでに理事者が客入土に依る泥炭地改良の緊要性に着目したる先見なり即ち三笠岡山の丘陵地に土取場として山林三町歩を購入以来年々客土の奨励を怠らず今や山容は一変し作土に泥炭質を認め得ないまで改良の成果を挙げ今なおこれを継続しつゝあり茲に創立三十年を迎えんとするに当り多年造田灌漑土地改良に尽瘁した設立以来の役員名を記録し以て先人の偉功を偲ぶとゞもに後来愈々幸多からんことを祈念するものなり

昭和三十二年八月

北海土地改良区岡山支線組合 清水 利信 撰文  
阿部 海秋 書

## 三笠市一の沢地区

三笠市萱野東

一の沢水源池堰堤

一の沢水源池取水塔



三笠市萱野東

一の沢水源池堰堤

### 近代水道百選の証碑

右は近代水道百選記念企画近代水道百選に  
選定されたことを証します

昭和六十年五月二十七日

近代水道百選委員会 委員長 小林 重一  
企 画 厚生省水道環境部  
主 催 日本水道新聞社  
建設年月日 明治四十一年十月十日  
建設者 所有 岩見沢市  
指 定 昭和五十三年十二月八日



岩見沢の水道施設は自然の飲料水に恵まれていないところから市民が大決心し、完成させたものであり全国で十六番目道内では函館に次ぐ施設であるが取水塔は道内最初のものである

岩見沢市教育委員会

## 岡山神社境内

### 東宮殿下行啓記念碑

彫刻人 礪川

(裏) 三笠山村三部 共同建立  
岩見澤町岡山部



## (3). 幾春別川右岸地域

### 北本町地区

#### 岩見沢発祥の地記念公園

#### 岩見沢発祥の地碑

##### 岩見沢発祥の地由来

明治十一年八月開拓使によって旅人保護のためこの地に官設休泊所が設置され、のち狩野末吉がこれを借り受け宿泊と渡し守を営みました。これが岩見沢市街地定住の第1号といわれています。また道路工事に従事した人々がゆあみをして汗を流し落した沢、浴沢から岩見沢の地名が生れたといわれていますがその場所もこの近くです。そしてこの両岸から次々と人が住みつき今日の岩見沢が誕生しました。なおこの碑は、昭和五十八年に岩見沢開基百年を迎えるにあたり記念事業の一環として岩見沢青年会議所が第三十一回北海道地区会員大会主管記念として一般市民の協力を得て建立し、市に寄贈されたものです。



昭和五十七年九月五日 岩見沢市長 国兼孝治

#### 岩見沢発祥の地記念公園 記念公園碑

##### 碑文

この公園は、岩見沢市開基百年 市制施行四十周年を記念し、岩見沢発祥の地記念公園として総事業費壱仟五百万円で造成したものです。なお、このうち次の方がたのご好意を得て施工しました。

昭和五十九年十月三十一日

##### 寄贈

1. 発祥の地記念公園造成費 金壱仟万円也  
故 石黒 和平 殿
1. 発祥の地記念碑 岩見沢青年会議所殿
1. 園名標識 大川 準治 殿  
題字 岩見沢市長 国兼孝治 書



## 岩見沢発祥の地記念公園

山口県柳井市大島平郡出身

### 士族移住記念碑

明治十六年札幌縣甲第二十五号 北海道移住士族取扱規則により 同十七年二月出願同年七月 共同運輸会社汽船通濟丸に特約旧里山口縣大島郡平郡村字西で入船移住戸数二十七戸人員百十余名乗船 北海道小樽港へ直航 八月二十五日石狩国空知郡岩見澤に移住す 当時札幌縣勸業課 岩見澤派出所あり移住者監督保護を受く 同年九月岩見沢村を置き 戸長役場を設けらる 十八年大野両氏移着 依て二十九戸となる 同年限り移住士族取扱規則廃止せられる 之に依て各縣より移住者総数総二百七十七戸

之を開村の創業者とす

開村二十年 明治三十六年春

西村藤左衛門の依頼により

浅海敦之助 之を記す



## 岩見沢発祥の地記念公園

### 開拓五十年記念碑

(表面題額) 昭和九年九月

開拓五十周年記念碑

岩見沢町長 高柳廣蔵

(裏面) 明治一七八年移住士族 二七七戸

#### 入植者 (移住者戸数 二七七戸)

山口縣士族	阿武正貞	以下	一三六戸
鳥取縣士族	絹川勘市	以下	一〇五戸
石川縣士族	山本直繁	以下	一二戸
滋賀縣士族	桑原義雄	以下	二戸
山形縣士族	本間文蔵	以下	五戸
秋田縣士族	渡部三治	以下	二戸
大分縣士族	越川仙造	以下	二戸
三重縣士族	土屋平三		一戸
富山縣士族	高瀬正之	以下	二戸
愛媛縣士族	池内恒次郎		一戸
島根縣士族	常松 緑	以下	三戸
福岡縣士族	中村芳蔵	以下	六戸





## 西川町地区

岩見沢土地改良推進事務所敷地内

### 組合創立功労者之碑

碑文

(表) 岩見沢町川向土功組合

組合創立功労者之碑

北海道廳長官 池田 秀雄 題額

(裏) 昭和六年六月 創立三十ヶ年記念式典之日建立

功労者芳名創立發起人 青木利一 相原貞次

平井達蔵 蓮見啓之進 河原吉太郎

朝山和一郎 大倉喜三郎 藤田覚路

創立当時の組合長 空知支庁長 村津 寛



越中開墾八幡神社境内

### 開拓八十周年記念碑

『應拓心』



幾春別川左岸 新川橋傍

### 開田記念碑

碑文

西部支線組合ノ区域ハ岩見沢市西川向一部及ビ上幌向ノ一部ニシテ純灌溉面積三九一町歩水路延長四里一五町歩余工事費総額三万九千余円ニシテ昭和五年工事完了空知川ノ清流ヲ北海土地改良区岩見沢幹線ヨリ導入灌溉ニ供シ其ノ後幾多ノ困難ヲ克服シテ一望隈ナキ美田トナシ生産ヲ増大シテ経済ノ振興ヲ図リ経営ノ基ヲ鞏クシ永ク其ノ慶福ヲ受ク茲ニ往時ヲ追想シテコノ碑ヲ建ツ

昭和三十三年九月十二日 建之



## 越中開墾八幡神社境内

### 開拓記念碑

#### 碑文

草分移住者芳名

明治二十四年	明治二十五年
三枝 善作	阿波加 伊三郎
三枝 治朗右エ門	松田 清六
吉井 時次郎	伊達 重次
畠山 善三郎	細川 久次郎
寺崎 善右エ門	林 嘉吉
	松井 孝次郎

皇紀 二千六百年  
移住五十周年  
記念 昭和十五年建之  
岩見澤町長 高柳 廣蔵 書



## 出雲神社境内

### 青木農場開放記念 『開拓碑』

#### 碑文

抑々当時青木の地名は岐阜県人青木利一翁が明治二十三年三月札幌に移住し同二十五年四月国有未開墾地五十二万一千坪の払い下げを受けて此の地に自ら鋤入れされて農場開設に着手した事に始る 翁は開始当時より幾春別川流域一帯の造田事業に着目し明治三十五年岩見澤土地改良区の前身たる岩見澤川向土功組合を設立し同三十九年には東川向の一部に 越えて翌四十年には青木農場に造田事業が起され、灌漑水路の構築に排水溝の掘鑿にあらゆる苦心と努力を払われて今日の如き美田を見るに至った 一方農村子弟の教育にも深く意を注がれ明治三十二年に農場事務所を仮校舎として寺子屋を開設した之が西川向小学校の発祥でありてそれより簡易教育所を経て同四十二年岩見澤西小学校分教場として発足するや校地と建築費の大半を進んで負担され校舎の完成を見るに至ったのである 次に明治四十三年には出雲神社を建立し敷地と造営一切を奉仕され敬神の念を植付け民風の浄化に努力された 越えて四十四年には川向米作改良組合を設立して産米の改善を図ると同時に岩見澤産業組合を創設して農家経営の安定に寄与され四十五年には西川向堤防道路延長4軒に亘り全額私費を以てて巾員八米の模範道路を開鑿又水稻試験場を西川向に誘致するなど地方開発に尽された功績は枚挙にいとまがない 其後二代目三哉氏に及んで良く翁の遺志を継がれ之等各種の組合長としてその運営と発展に心血を注がれそれぞれ今日の隆盛を見たのである 昭和十一年には耕作農民には農地を開放して自作農たらしむべきだとの高邁な識見の下に全農場の開放を断行され小作者全員百七十三町歩の開放を受け待望の自作農として永住の地を得たのである此処茲に農地解放の恩恵を受けた全員相諮り青木翁父子二代の厚德を偲び碑を建立して永く之を記念せんとするものである

昭和三十三年八月

岩見澤市長 川村 芳次 書





## 青木公園

### 西川町開基百年記念 『開基之碑』

#### 碑文

明治十七年福井県人渡辺曾作が入地 更に同二十年山口県の人中村萬吉入植し開拓の鋤をふるう 千古斧鉞の入らざる未踏の原始林にいどみ 丈余の雑草を刈払い風雪寒冷の地に人々集まり来て開墾に精励し百年の星霜を記す 顧みれば開拓の艱難辛苦筆舌に尽し難く 先人の不屈な開拓者魂に畏れるのみ 母なる川幾春別川も毎年のように洪水を繰り返し度重なる大冷災害にもめげず試練に耐え忍んで将来の大成を結ぶ。土功組合の設立により美田の里となり 更に今日農業構造改善事業によって 区画整然たる圃場の並ぶは 農業近代化の先駆者として進取に富んだ風土の故なり 堅忍不拔の志を継ぎ 協同一致して更に産業の隆盛に励まんと ここに百年の歴史を踏まえ 先人の苦勞を偲ぶとともに温故知新 精気新たにして現代の苦難を克服し未来への飛躍を希う 先人の偉業をたたえ 現在の繁榮に感謝し来歴の一端を記して永く後世に伝える

昭和六十二年十一月六日

西川町百年記念実行委員会



## 岩見沢土地改良推進事務所敷地内

### 川向土功組合五十周年記念碑

#### 碑文

組合創立功勞者の恩を追慕して昭和六年組合創立三十年を記念し次の趣旨により功勞者の碑を建立せらる本組合設計計画は明治三十四年の頃より青木利一 平井達蔵氏等同志を糾合し諸般の協議を行ふ折柄北海道士功組合法の公布があり明治三十五年四月一日より実施せられるに当り時節来ると同年六月十八日 関係地主の相談会を催すに組合設立の議は萬場一致可決即時創立委員を専任し創立と共に初代組合長として空知支庁長村津寛氏を迎え工事費九万八千余円に達する当時としては巨額の調達については寧日寢食を忘れて東奔西走要路の交渉に当り熱意と努力は遂に低利にして長期償還公債の認可を得るに成功し委員は事業の準備に着手し之又困苦を耐え凌ぎ苦心経営の結果今や地区内の開田は一千五百余町歩の完成を遂げるに至り年歳土地の改良と共に増産を見確固とした組合経営の基礎定まる大正十四年更に工事費十四万六千余円を投じ夏期渇水時に備え本市野々澤に予備貯水池を築造して宝池と命名二百五十町歩涵養の有効貯水が可能で渇水時に於て偉大な効果を挙げている本組合の設立せられてより既に五十年の星霜を経る昭和二十七年二月一日に法令の定める処により組織の変更を行ふに当り功績を永久に記念し且功勞者顕碑建立の主旨を記す

昭和二十七年二月

五十年記念建之



## 岩見沢赤川神社境内

赤川開拓七十五周年記念

『開拓碑』



道當美唄達布軌道客土事業

竣功記念碑 『竣功』



## 岩見沢土地改良推進事務所敷地内

圃場整備之碑

碑文

圃場整備事業は、農業生産基盤である耕地の区画形質の改善、用排水路、道路の整備及び耕地の集団化を総合的に実施し、機械の効率的な運行と、適切な水管理を行いうる生産性の高い条件にすることにより経営規模の拡大と高能率、近代化農業の展開を促進し、活力ある農業、楽しめる農村の建設と、安定した農業生産の基礎を築く不可欠の一大事業である。岩見沢土地改良区の農家は、八十年の昔、他に魁けて土功組合を結成した先人の進取の氣象を承継ぎ、夙にこの事業の意義に目を向け、昭和四十九年には西川地区が三百八十四ヘクタールの受益地 拾億七千万円で着工をしたのを始め、昭和五十一年度 大願地区四百六十六ヘクタール 貳拾億四千八百万円 昭和五十二年 西川第二地区 三百七ヘクタール 拾六億九千万円 昭和五十四年度 稔地区 二百五十六ヘクタール 拾六億貳千万円 宝水地区 百十ヘクタール 七億貳千万円 昭和五十五年 川向地区 二百三十ヘクタール 貳拾貳億壹千万円の巨費を投入して着工を見たのである。



付設の『心訓』



事業は、岩見沢市 土地改良区 農業協同組合その他の農業関係団体をもって岩見沢市農業近代化推進協議会を結成し、空知支庁の指導のもとに、空知支庁東部耕地出張所と一体となって推進した。当初計画策定以来拾余年の歳月は、その間に農業をめぐる諸情勢の変遷はめまぐるしいものがあり、部分的な修正も幾度びか行いながらそのほとんどが竣工し、全事業の完了も間近となったのであるが、この一大偉業は地域農業史に永く残るものと信ずる。茲にこの事業の実現に最善を尽された事業促進期成会役員諸氏の功績を讃え、更に岩見沢土地改良区内六地区の地域農業の発展を願い、この碑を建立したものである。

昭和五十九年七月吉日 建立

岩見沢市長 国兼 孝治 撰書

## 岩見沢土地改良推進事務所敷地内

### 川向土功組合創立百周年記念碑

#### 『 恵水百年 』

##### 碑 文

本土地改良区は、前身である土功組合設立計画を明治35年頃より青木利一氏、平井達蔵氏等同志を糾合し、諸般の協議を行う折柄北海道土功組合法の公布があり、明治35年4月1日より実施せられる当たり時節来ると、6月18日関係地主の相談会を開催するに組合設立の議は満場一致可決し、即時創立委員を選任し組合設立の運びとなり、明治35年12月26日北海道土功組合法発布2号指令を以って川向土功組合が設立された。初代組合長として空知支庁長 村津 寛氏を迎え巨額の工事費の調達について率日寝食を忘れ東奔西走要路の交渉に当たり熱意と努力は遂に低利にして長期償還公債の認可を得るに成功し、委員は事業の準備に着手し、これ又困苦を耐え凌ぎ苦心の経営により今日の基礎を築いたのである。昭和24年6月に土功組合法が廃止され新たに土地改良法が施行されたため昭和27年2月1日に北組第83号をもって岩見沢川向土地改良区となったのであるが、昭和31年に国営総合美唄地区かんがい排水事業計画により岩見沢、北村の一部を地区編入するため昭和31年4月20日に名称変更の申請をし、現在の名称岩見沢土地改良区となったのである。近年、国営総合美唄地区かんがい排水事業を契機として団体営事業を実施し、昭和49年には団体営事業を打ち切り、農業生産基盤である農地の区画整理、用排水路、道路の整備等を総合的に実施し、機械の効率的な運用と適正な水管理を行いうる生産性の高い条件にすることにより経営規模の拡大と高効率近代化農業の展開を促進し、安定した農業生産の基礎を築く一大事業である道営圃場整備事業に着手し、今日に至るまでの農業経営の近代化を図るべく種々の事業を実施してきた。今日の厳しい農業情勢の中、川向土功組合の創立以来、百年の星霜を経る平成13年創立100年の記念事業として先人達の偉業を讃え、功績を後世に末永く語り伝えるために恵水百年の碑を建立するものである。



平成13年10月建立

創立100年記念実行委員会

## ひょうたん沼公園

### 岩見沢圃場整備事業十五周年記念塔

#### 記念塔の由来

岩見沢は明治十七年、十八年の両年に亘り、鳥取、山口県などの士族の集団移住によって開拓されて以来、北海道特有の厳しい自然条件のもとで先人達のあらゆる悪条件にも屈することなく、困苦欠乏に耐え努力された結果が今日の岩見沢市農業の基礎となっている。その後昭和四十年代より日本経済の高度成長に伴い他産業との所得格差を無くし、労働力不足に対応する機械化等、農業構造の改善を行い、生産性の高い農業の確立を目指し、昭和四十五年に岩幌南地区圃場整備事業に着手以来、西川、幌向川右岸、岩峰、大願、西川第二、上幌向、稔、宝水、川向、上志文、志文地区の道営十二地区、毛陽、大願地区の団体営二地区、計十四地区、実施農家八三六戸、実施面積三、六二二ヘクタール、総事業費二九一億一三八一万円の巨費を投じ、受益者の強い熱意と各農業関係機関の協力をあおぎ北海道、空知支庁の指導のもとに推進して来たところであります。この「協調」の塔は近代化農業の創出を目指した圃場整備事業が十五周年をむかえるにあたり、その偉業を讃え、あわせて永遠に自然の摂理になぞらい、人の最大の英知をかたむけながら、互いに協調をはかりより一層の発展をこいねがい、記念事業の一環として、岩見沢市圃場整備事業十五周年記念式典実行委員会が建立し、市に寄贈されたものです。



昭和六十年十月三十日

岩見沢市長 国兼孝治

## 稔町地区

### 稔神社境内 自作農創設記念碑

#### 碑文

明治三十四年二月男爵大倉喜八郎閣下ハ本道開拓ノ聖慮ニ感噴シ温如ノ草原トシテ顧ラレザル東川向ノ地ヲトシテ一大農園建設ヲ期シ其ノ事業ヲ挙ゲテ平井達蔵翁ニ委嘱セラレタリ翁ハ吾等ノ良キ指導者トシテ櫛風沐雨開拓ノ業ニ碎身シ以テ頃々タル美田トナシ豊太郎頼雄ノ両氏亦翁ノ遺志ヲ継ギクク其ノ業ニ当ラレシモ爾後男爵大倉喜八郎閣下ノ統裁スル大成殖産株式会社ノ組織下ニ編入セラレタリ時偶々自作農創設ノ議起ルヤ欣然其ノ挙ニ出デラレ関係官公衙ノ協力ヲ得テ昭和十五年十月二十五日土地開放ノ協定ヲ見ルニ至レリ顧ルニ吾等ハ故達蔵翁管理ノ下ニ微々トシテ耕鋤ノ業ニ服シテヨリ四十有余年ヤ今自作農トシテ大東亜確立ノ為メ一層農業奉公ニ挺身シ得ルニ至リタルハ実ニ農場主並ニ関係各位ノ宏大ナル恩澤ナリ茲ニ其ノ縁由ヲ記シテ以テ之ヲ後世ニ伝ヘントス

昭和十七年九月十五日

題額 空知支庁長 高尾 善次  
撰文 村田 要助





鉄北地区多目的学習会館敷地内

## 稔町開基百年記念碑



## 大願町地区

大願つつじ公園

開基百年記念碑

『穰邑』

『風雪百年』

風雪百年 碑 文

陽光を遮る鬱蒼たる原生林 或は千古の不毛を被う蘚苔 或は慶木疎にして鳥獸茅間に戯る 明治二十七年発祥の鋤打入れり 大いなる希いを込めて大願と呼称し 創墾始る 嗚呼 先人らの血と汗 幾多の苦難と闘い大地に沁み込む星霜百年 穰沃全野に広がるここに郷党 愛郷の念篤く磐石を据えて開基百年を記し 永久に亘る弥栄を願う

平成六年八月二十七日 慶祝



勲一等旭日大綬章  
衆議院永年在職議員

小平 忠

## (4). JR 函館本線沿線～幌向川下流右岸地域

### 若松町地区

若松町 JR 函館本線沿線

#### 聖蹟記念碑

碑 文

昭和十一年十月一日 畏クモ

天皇陛下 岩見澤北区稲熱病防除区ノ状況ヲ叡覽アラセラル 聖慮深遠洵ニ感激ニ堪ヘサルナリ頃者有志胥相謀リ碑ヲ建テ斯ノ光榮ヲ不朽ニ伝ヘントシ乃チ来リテ文ヲ予ニ請フ因テ梗概ヲ記スルコト此ノ如シ

昭和十二年六月 北海道庁長官 池田 清 謹撰  
竜堂 村 惣一郎 謹書



### 御茶の水町地区

お茶の水交流センター

#### 開基百年碑

#### 『開基之碑』

碑 文

明治二十六年、伊勢の人 板垣タダ史氏が伊勢団体を組織し、中矢徳次郎氏ほか数戸が開拓の雄図を抱き遠く故郷を離れ、この

地を永住の地と定め開拓の鋤を打ち下ろされた。入植当時は人跡未踏の荒涼と湿原の原野、御茶の水川が縦断する流域は想像を絶するような樹木が繁茂し昼なお暗き原始林と自然の苛酷なまでの寒冷のこの地に、人々が集まり来て開拓に精励し、ここに一世の星霜を迎え、御茶の水町の基礎が築かれた。流域地帯に入植した最初の開拓者が、飲料水を求めて掘った地面より湧き出た清水、最もお茶に適した水と認められたことから、地名を御茶の水と命名した。明治二十八年に、川合定吉氏のご厚意により三反七畝の神社敷地の寄贈を受け、明治三十年に宇治矢山田の伊勢神宮より天照大神の分霊を受け、五十鈴神社として家内安全と五穀豊穰を願い、更に地域住民の融和の証として、春秋二回の例祭を行うのがならわしとなった。これが現在の御茶の水神社の前身である。昭和五年に、北海灌漑溝の完成を見るに至り、待望の畑作から稲作農業への一大転換が実施されて造田が開始された。先人の意志を受け継ぎ地域住民一同よく融和努力され、土地改良事業等を積極的に実施し、一変して黄金波打つ生産の地となり、今やその面積六百ヘクタールを有する近代農業の生産基盤が確立され今日に至る。茲に開基百年を迎えるにあたり、地域住民挙げて先人の偉業を讃え、労苦を偲び、感謝の誠を捧げ、併せて理想郷土の建設に無限の発展を祈念し、新たな飛躍に向かって御茶の水町の指標として、この碑を建立する。

平成五年九月十二日

御茶の水町開基百年記念事業実行委員会





## 上幌向地区

上幌向神社境内

### 上幌向上水道完成記念碑

#### 碑文

昭和三十年十一月三日 完成 建之

上幌向南区西川向地区期成会員一同

本管工事費 一金 四百万円也

支管工事 一金 貳百七十万円也



## 中幌向町地区

中幌向神社境内

### 中幌向開基百年記念碑

#### 碑文

明治二十四年新潟県人今井榮蔵氏が幾春別川沿いに、福井県の人佐藤氏一族は国道沿いに、初めて開拓の鋤を打ち下ろしてから百年の歳月が流れた。この間打ち続く冷害、水害などの厳しい自然条件を克服した先人達の血と汗の結晶により、今日の郷土中幌向が築かれた。昭和五年、北海土功組合灌漑溝の完成により、待望の水田化が達成し、戦後の農地改革で耕地は耕作農民のものとなった。昭和五十二年岩見沢市で初めての道営圃場整備事業が竣功、続いて農業構造改善事業による協業化と、更に道営土地改良総合整備事業が完工し農業形態は一変した。又、時代の波は国道十二号沿線に住宅、事業所、公共施設の進出を促し、将来の中幌向に向けて大きく羽ばたこうとしている。茲に開基百年を迎えるにあたり、先人の偉業を讃え、労苦を偲び、報恩感謝の誠を捧げ、併せて将来ますますの発展を祈念してこの碑を建立する。

平成二年九月

中幌向開基百年記念事業実行委員会



幌向第1ライスセンター敷地内

### 道営圃場整備事業中幌向地区

#### 竣功記念碑

#### 碑文

本道開拓の初期 明治二十四年先人はこの地に開墾の鋤を打ち下ろし 幾多の辛酸を嘗めながら営々と農業に励んだ 幾星霜を経て大正十三年北海土功組合の灌漑工事に着手され 畑は徐々に水田となり 昭和四年灌漑溝



の完成と共にこの地は米の一大生産地となり 秋には一面黄金の稲穂が波打つ美田を眺望出来るのはかつての大試練に打ち克った尊い成果である 昭和四十年頃より 国の農業政策は転換期を迎え水田の休耕転作が要求されて来た しかし吾々はこの地が米の生産地であることの自覚と認識を深め 更には効率的な協業 機械化によって労働の省力化を図り良質米の生産による水田経営の合理化と農家経済の安定を求める近代的機械化農業への転換に意欲を燃やし その基盤確立のため圃場整備事業の気運が盛り上がり昭和四十四年四月四日当期成会の発足を見た 爾来 岩見沢市 北海土地改良区 岩見沢幌向農業共同組合等各関係機関の協力の下に 重なる難関を克服し関係者一致協力圃場を大型化し 換地事業の完遂と相俟って 灌漑排水設備の改良を加え 並に幹支線農道を完備 隔世の感ある圃場整備の完成を見るに至った 茲にその概要を記し 永く後世に伝えるものである

昭和五十二年十一月

岩幌南地区道営圃場整備事業期成会

会長 大橋 一 蔵

## 幌 向 地 区

### 中央公園

#### 小平忠顕彰碑

#### 『 螢 雪 之 地 』

#### 碑 文

この地は先人の入植以来百十数年を経ている幌向小学校は明治三十一年に岩見沢尋常高等小学校の分校として、この地に敷地三百坪一教室で授業を開始し、明治三十七年に独立した。その後地域の発展と近代教育の要請に応じて別の地に校舎を新築して移ったが終戦までは御真影奉安所の位置したところでもある。小平忠氏は多年に亘る政治活動を平成元年に引退し 翌二年には後継者小平忠正氏の当選を機にこの地千五百平方メートル余を取得し、公園に造成して幌向中央公園として岩見沢市に寄贈された。小平忠氏は大正四年八月栗沢町に生まれ幌向小学校に学び、その後向学の志堅く遂に日本大学経済学部を卒業する。貴族院議員千石興太郎秘書、南方方面従軍、北海道指導農協連専務等の経歴を経て昭和二十四年一月若冠三十三歳で見事に衆議院議員に当選した。爾來国政の場に在っては、戦後日本の復興は食糧の増産にありとその先頭に立って奮闘することをはじめ、永年に亘って国政各般に情熱を傾け、特に北海道においてはおこなわれている治山、治水、土地改良事業や農業基盤整備にあたる等その業績は枚挙に暇なく、為に北海道に小平ありと刮目されるに至ったのである。この偉大な業績に対し衆議院は昭和五十二年に院議を以て永年在職議員として表彰し、昭和六十一年春の叙勲においては勲一等旭日大綬章親授の栄に浴した。郷里幌向にあっても地域の開発と発展には多大な貢献をされたがこのたびの公園の寄贈を機に有志一同相諮り、氏の高邁な業績に感謝しこれを讃えるため小平忠顕彰碑を建立する。



を平成元年に引退し 翌二年には後継者小平忠正氏の当選を機にこの地千五百平方メートル余を取得し、公園に造成して幌向中央公園として岩見沢市に寄贈された。小平忠氏は大正四年八月栗沢町に生まれ幌向小学校に学び、その後向学の志堅く遂に日本大学経済学部を卒業する。貴族院議員千石興太郎秘書、南方方面従軍、北海道指導農協連専務等の経歴を経て昭和二十四年一月若冠三十三歳で見事に衆議院議員に当選した。爾來国政の場に在っては、戦後日本の復興は食糧の増産にありとその先頭に立って奮闘することをはじめ、永年に亘って国政各般に情熱を傾け、特に北海道においてはおこなわれている治山、治水、土地改良事業や農業基盤整備にあたる等その業績は枚挙に暇なく、為に北海道に小平ありと刮目されるに至ったのである。この偉大な業績に対し衆議院は昭和五十二年に院議を以て永年在職議員として表彰し、昭和六十一年春の叙勲においては勲一等旭日大綬章親授の栄に浴した。郷里幌向にあっても地域の開発と発展には多大な貢献をされたがこのたびの公園の寄贈を機に有志一同相諮り、氏の高邁な業績に感謝しこれを讃えるため小平忠顕彰碑を建立する。

平成二年十月十六日

撰文 岩見沢市長 国 兼 孝 治



## 金子町地区

### 金子神社境内 自作農創設之碑

#### 碑 文

抑々当地ハ明治二十七年在住小樽ノ金子元三郎時之北垣北海道庁長官ノ勤奨ヲ容レ本道開拓ノ一翼ヲ胆ヒテ大農場経営ヲ志シ 此ノ地ニ二百余万坪未開地貸下得巨費ヲ投ジ小作人ヲ入植シ之ヲ鼓舞激励シテ天日暗キ密林ヲ伐リ開キ泥濘膝ヲ没スル草原地帯ヲ開墾シ進ンデ幌向川ノ水利ヲ功用シテ造田ニ着手或ハ道路ヲ開キ溝渠ヲ鑿シ凡ユル障碍ヲ克服シテ銳意本道拓殖ニ貢献セントナシ拮据經營幾星霜遂ニ素志貫徹ノ覇業ヲ改メ得タリ此ノ間農場経営ノ方策亦適切ヲ極メ主従一体共存共栄ノ実ヲ挙ゲ協心戮力生業ニ励ミ正ニ今日ニ見ル美田良圃ノ確然タル基礎ヲ築ケリ超テ昭和十年時勢ノ進運ト国策ノ方途ニ鑑ミ敢テ自作農創設ノ功ナルヲ決意セラレ昭和十二年ニ至ル三ヶ年ニ亘リ周到ナル計画ノ下全農場田畑六百十七町歩開放ノ完遂ヲ見タリ即チ祥ヲ分チ享クル全耕作者四十五名ノ欣幸真ニ筆舌ニ尽ス所ニアラズ爰ニ金子元三郎翁ノ美德ヲ敬慕シ同志相謀リ碑ヲ建立シテ永遠ニ記念セント 云爾



昭和三十一年七月

岩見沢市長 川村 芳次 撰文

### 金子神社境内

#### 道営軌道客土事業

##### 竣功記念碑

衆議院議員 小平忠 題額

当金子地区綜合土地改良事業の地域は泥炭地が多く排水不良の上幌向幾春別両河川が瘦氾濫し営農も容易ならざるものがあつた 自作農が創設され昭和一五年に金子昭和水利組合を設立し 同二八年土地改良法の制定に伴い金子土地改良区と改組し 面積三一三. 六ヘクタールを認められた 次いで桂沢ダムの完成により新規造田六二ヘクタール 補水二六〇ヘクタールの水利権を確保し 更に幌向川上流地区の加入により同三三年地区変更をして 許可面積五二九ヘクタールとなり今日に至つた この間灌漑事業としては昭和三四年以降国営による導水門排砂門及び幹線溝路の改良工事延長約四キロ 工費七五七三万円 一方団体営による水路装工々事延長四八二五メートル工費二〇三七万円をもち同四〇年に完成を見た 排水事業については金子土地改良区が主体となり上幌向 双葉 下志文 志文 南の各町会とはかり期成会を結成 昭和二六年以来国営による幹線として南三線 南五線 東七 九 一五 一六号の各排水工事延長約一七キロ 工費九四四〇万円あわせて団体営による補助事業 工費五六〇〇余万円をもち同四一年に 完成を見るに至つた 客土事業については隣接地域の一部を加えて期成会を結成 昭和三二年以降道営軌道客土事業による客土工事面積三八八ヘクタール工費一五五九四万円にて同三八年完成を見た その



他農地の交換分合 ブロックによる畦畔の改良等も施工され この地域は今や昔日の面影もなく  
 全域にわたり営農の近代的基盤が整備された この開発の大業は  
 衆議院議員小平忠氏のご尽力と関係諸官庁のご配慮を得 市また  
 これに協力してこゝに多年にわたる事業の竣工を見るに至った  
 地区内受益者一同敬意と感謝を捧げ特に中心となり最善を尽された  
 金子土地改良区理事長大灘伝之丞氏の功績を讃えて胸像を贈り  
 事業の推進に努力された役員諸氏の名を刻み こゝに竣工を記念  
 してこの碑を建立したものである



大灘伝乃丞氏の像

昭和四十一年八月三日

岩見沢市長 川村 芳次 撰  
 日本書学院会頭 阿部 海秋 書丹  
 石巻市 石井 敬三郎 謹刻

## 下志文町地区

下志文神社境内

### 下志文青年支部合同記念碑

#### 碑 文

昭和十二年七月支那事変勃発以来茲ニ五年挙国一体大東亜  
 建設大業ノ完遂ニ邁進スル秋我等青年新体制ニ即応粉骨挺  
 身以テ皇謨ヲ翼賛シ奉リ国運推進ノ一大源泉タル可ク男女  
 青年支部大同団結ノ秋ニ際会其の發展的解消ヲ為スニ当リ  
 之ヲ記念シ本碑ヲ建立ス

昭和十六年六月

岩見澤青年団下志文男子・女子支部



#### 支部沿革

- 明治二十九年 若連中結成サル 之下志文支部ノ前身ナリ
- 明治三十五年 下志文青年義真会ト改称会則十一条制定
- 大正 六 年 岩見澤青年団下志文支部旗制作
- 昭和 三 年 御大典記念トシテ揭示板建立
- 昭和 八 年 双葉会誕生ス 之女子下志文支部ノ前身ナリ
- 昭和 八 年 優良支部トシテ岩見沢青年団長ノ表彰ヲ受ク
- 昭和 九 年 岩見澤女青年団下志文支部ト改称支部旗制作
- 昭和 九 年 県社昇格ヲ記念シ岩見澤神社境内唐松植樹
- 昭和 九 年 空知聯合青年団長ヨリ表彰サレ修養綬ヲ受ク
- 昭和 十一年 優良支部トシテ岩見沢女青年団長ノ表彰ヲ受ク
- 昭和 十一年 陸軍特別大演習御統監御巡視開鑿工事奉仕
- 昭和 十一年 男女支部代表札幌ニ於テ御親閲ノ光栄ニ浴ス
- 昭和 十二年 空知聯合青年団長ヨリ表彰サレ奉公綬ヲ受ク
- 昭和 十二年 空知聯合青年団長ヨリ表彰ヲ受ク
- 昭和 十五年 紀元二千六百年記念トシテ神社境内ニ植樹ス



## 志文地区

志文地区 消防会館敷地内

道営圃場整備事業志文地区

竣功記念碑 『圃場整備之碑』

碑 文

明治二十三年、先人達がこの地に開墾の第一歩を踏み入れ、次々と開墾の斧鋤が打ち下されて百年、入植当時開拓に当たった先人達は、大雪におおわれた原始林の伐採に始まり、うっ蒼と繁る藪を切り拓き、其の開墾に寸暇を惜しんで大地と取り組んだ努力の積み重ねにより、今日的美田と豊かな郷土があるのである。それから入植者達は五町歩区劃を一戸分として未来の安定した農業を志してきた。やがて此の地は重要食料である米の安定的な生産を図り、第二次世界大戦及び戦後の食料危機時代の重要な役割を担った。然るに昭和三〇年代より米国等から食料輸入が増加する中で、あの情景豊かで美しい菜の花畑が消え去り、米穀価格は実質で戦前戦後の六分の一乃至十分の一に下がり米の生産農家の窮状は其の極限に達している状況下において、岩見沢公園の関連整備並びに国鉄万字線廃止に伴う区画整理等、地区地域の発展と水田農業の生産性向上という至上命題により会員諸氏の深い理解と努力のもとに昭和五十九年八月八日圃場整備期成会発足となり今年十一月目出度く竣功式挙行の運びとなった次第である。茲に此の事業に携った諸氏に敬意を表すと共に此の大地を永遠に保全して守り、会員諸氏の末永き発展を願いこの碑を建立する。



平成二年九月

岩見沢市長

国兼孝治書

平成三年十一月三十日

道営圃場整備事業 志文地区期成会会長

渡辺秀雄

志文地区冷水 志文簡易水道記念碑

碑 文

由来この地帯は飲料水に恵まれず 水質悪くその上濃茶褐色で加うるに最近至る所に井水涸渇するに至り市から運搬給水を仰ぐ等生活の不安極度に達する時偶々大灘伝之丞議会議員の先達となり地元有志と相諮り市はこれに協力して市営簡易水道計画を樹て志文金子下志文二俣の地域に隣接栗澤町地域の一部を加えて給水することとし昭和三十四年七月二十九日その筋の認可を待八月二十五日工を起し翌年三月三十一日竣功を見るに至る地域住民の歎喜之に過ぐるものなし今後永くこの恩恵に浴し皆の栄え行くことを祈念して止まないものである



昭和三十五年三月三十一日

岩見沢市長 川村芳次 謹書

## 志文地区冷水六線

### 金志揚水場竣工記念碑

#### 碑 文

金志土地改良区は大正十一年金子ノ澤に貯水量五五五千噸の溜池を築造して百五十町歩余の水田を完成したが漸年水不足により灌漑の運営上常に困難が伴った偶々昭和二十六年桂澤ダムによる美唄地区綜合開発計画が着手され之に乗じて既成田の補水と三十四町歩の新規開田計画樹立完成すべく昭和二十七年東肇氏が当改良区に呼びかけられ当時の理事長浪田米次郎氏が地元組合員と相計り揚水灌漑計画の推進に努め昭和三十二年当時の理事長高松繁一氏は組合員と協力一致事業の進展に努め翌年四十五馬力の揚水機並に揚水場と二軒余の幹線水路工事等総事業費一阡四万円の設計は玉山清作氏によって完了し団体営補助事業として認められ各関係官庁の指導により翌三十四年九月中村工務所並に日星電機の請負にて着工越えて三十五年五月全体事業の完成を見るに至った陽光を浴びて此処に佇む時組合員の努力と美田の齎す幸を悦び茲に記念の碑として建立す

昭和三十五年七月八日

岩見沢市長 川村 芳次 謹書  
金志土功改良区



## 志文本町 辻村邸地先

### 辻村頌徳碑 『頌徳』

#### 碑 文

皇膜謨夙ニ本道拓殖ノ振興ヲ論シ給ヒ 斯業日  
二月ニ駿々發達シ今ヤ各農村競ツテ水田開發ニ  
熱誠努力シ其ノ効果ノ顯著ニシテ国家富強ノ根  
基ヲ確立スルニ至ル然ルニ往年当志文灌漑組合  
設立ノ企画アルヤ 時機草創ニ属シ物資ノ供給  
起工ノ方法等完備セス其ノ施設經營ノ苦心言語  
ニ絶セリ 明治三十四年篤志家辻村高藏 長谷  
川宇三郎 宮本銀松ノ諸氏始メテ水路ノ実測ヲ  
為スモ当時ノ民心未ダ稻田収益ノ確實ヲ信セス 且多年凶作ノ餘弊ニ困シ 容易ニ其ノ事業着手  
ノ機運ニ達セサルモノアリ 而シテ明治四十一年辻村直四郎 長谷川宇三郎 宮本銀松ノ三氏更  
ニ之ガ成功ヲ誓ヒ部民ヲ会シ水田開發ノ急務ナルヲ懇説シテ衆人ノ賛同ヲ得 茲ニ酒井忠蔵氏ト  
供ニ之ガ実行委員トナリ爾來熱誠盡力四箇年ニ及ビ漸ク其ノ目的ヲ達スルノ端緒ニ就キ直ニ組合  
ノ組織ヲ整頓シ大正二年四月工ヲ起シ同年十一月完ク竣成ノ功ヲ告グ 其ノ事業費實ニ參萬余円  
ノ鉅額ヲ投ジ成田百五十町歩ノ灌漑ヲ見ルニ至レリ 此間水利權ノ獲得ニ水路敷地ノ買収ニ其ノ  
他幾多ノ難關ニ遭遇セルモ 辻村直四郎外三氏ノ拮据盡瘁ハ遂ニ豫期ノ成績ヲ擧ゲ今ヤ一望萬頃  
穰々ノ美田ト化シ組合員一同茲ニ子孫百年ノ計ヲ立ツルヲ得タリ 其恩其徳誰カ欽仰感激セラル  
モノアランヤ 之レ嘗ニ目前一時ノ營利ニアラズシテ洵ニ今後後進督励ノ龜鑑タルベシ 因テ之  
ガ沿革ヲ叙シ文ヲ石ニ勅シ以テ頌徳ノ意ヲ表ス

大正八年五月 建 書者 高井 幸次郎  
昭和五十五年五月 志文土地改良区





## 志文本町 辻村邸敷地内

### 辻村農場自作農創設記念碑

#### 碑 文

当農地は明治二十四年三月神奈川県人辻村直四郎翁が当時二十二才の若冠で北海道開拓に志し 松田学氏の貸下未墾地三十余万坪を譲受翌二十五年五月二十八日単身入植したるを以て嚆矢とする 再来人跡未踏熊声をきき野鳥を友として 昼尚暗き原生林に只管開拓の斧を振ったものであった 明治二十六年この地をシュブンベツの川名に因み志文と名く 凡ゆる艱難辛苦と困苦欠乏に耐え原始さながらの生活にひるまず敢闘すること数年 この後年を経るに従い翁の後をおい小作人として入植するもの次第に増加するに至った 明治三十一年大半の開拓を終え 超えて同三十三年十一月全地の開拓に成功し無償付与を受くることになった 引続き苦闘の甲斐あり立派な畑地となったが大正二年十一月志文灌漑溝の完成によって 内五十余町歩は良田となり 次で昭和四年北海道土地改良区灌漑溝の完成に依り 一躍現在の如き豊沃の美田となった 一方交通文化も著しく開け住みよい農郷となった 昭和十三年四月農地調整法の公布に伴い昭和十六年一月以来 辻村翁との間に自作農創設の胎動を見た時偶々昭和二十年八月十五日大東亜戦争の終結せらるゝに及んで諸政一転農地改革も取上げらるゝことになり 昭和二十一年十月自作農創設特別措置法及同二十一年十月公布せられ 急速に自作農創設の機運高まり地主と共に辻村農場自作農創設組合を設立し一部の農地交換分合も併せ行い三十二戸の耕作者に田畑百余町歩が自作農創設せらるゝことになった 以来全耕作者は益々愛郷の念深り 多年の研鑽努力により年々増収の実を上げ 子々孫々安住の楽土として日々を悦び睦み 皆本業にいそしみ居り 先覚諸士に深く感謝の意を表している 此に自作農創設十周年を記念し これを建つ

昭和三十年十一月三日 岩見沢市長 川村 芳次 謹



## 志文本町 静雲寺境内 記念碑

#### 碑 文

三浦伊次郎氏ハ青森県中津軽郡和徳村字向外瀬ニ生ル  
明治二十一年単身渡道当志文ニ来往鋭意開墾ニ従事シ且地方ノタメ尽瘁セラル 遇々明治二十四年北海道炭礦鉄道株式会社ハ岩見澤室蘭間ノ鉄道ヲ布設セリ依テ移民増々多ク地方開発非常ナルカヲ以テ進展シ遂年人口増加シ各産物又激増ス是ヨリ曩鉄道布設当時会社ハ岩見澤清真布間ハ絶対停車場建設不必要トナシ茲ニ於テ氏ハ地方発展ノ為停車場ノ必要ヲ痛感シ地方ノ有志ヲ力説シ種々会社ト折衝ヲ重ネ日夜寢食ヲ忘レ奮闘奔走ノ結果敷地ニ自己所有地ヲ無償提供シ明治三十四年八月八日時ノ炭礦鉄道株式会社専務取締役井上角五郎氏ト先簡易貨物積却場ノ設置契約ヲ締結シ同年中是ヲ竣功ス 爾来当地方発展ト俱ニ今日ノ停車場ニ至ル依氏ノ効跡為記念建設是

寺江 岩松之 書  
昭和二年七月 建立



## (5). 幌向川上流沿岸地域

### 上志文地区

国鉄万字線上志文駅跡地

記念碑

『国鉄万字線上志文駅跡』

碑文

大正三年十一月十一日、室蘭線志文駅より分岐する万字線（志文～万字炭山間）が開通し、上志文駅が開設される。日本国有鉄道経営再建促進特別措置法に基づいて、昭和六十年三月三十一日で廃止となり、七十余年の歴史を閉じるにあたり、万字線の果たした役割を後世に残すため建立するものである。

昭和六十年十一月十一日

岩見沢市長 国兼 孝治



萩の山スキー場前交差点より  
朝日町方面へ 0.3 km

桜池水天宮

昭和五十七年十一月三日

第十一代 宮村小学校長

野沢 俊一 書



三の沢池畔

第二貯水池竣功記念碑

昭和二十八年十月

上志文土地改良区





上志文八号神社境内  
道営圃場整備事業上志文地区

竣功記念碑 『圃場整備之碑』

碑文

明治二十六年、うっ蒼たる昼なお暗き大森林に先人が開拓の鋤をおろし幾多の困難とたたかい営々と農業に励み幾星霜 たゆまぬ先覚者の尊い努力により大正十二年、上志文土功組合が結成され今日の基礎となった。その後、日本経済の高度成長にともない、農業は一大転換期を迎え、圃場の整備拡充が緊要となった。吾々は近隣に誇れる良質米の産地としての自覚と認識を深め、近代的機械化農業による水田経営の合理化を求め、昭和五十八年当期成会の発足を見た。翌年より事業に着手、旧国鉄万字線跡地をも取り込み圃場の大型化と用排水路、農道等の総合整備を実施、茲に整然たる美田が完成された。時を同じくして国営幌向川ダムも完成、慢性的水不足も解消され、近代的農業基盤の確立がなされたのである。この間受益者はもとより、関係各位の御支援のもと、本町開基百年の意義ある年に、隔世の感ある圃場整備事業の完了を見るに至った。茲にこの事業を後世に伝えんと共に、郷土の発展を祈念し、水稻発祥の地にこの碑を建立する。

平成二年十一月三十日



道営圃場整備事業上志文地区

期成会会長 笹木 博

朝日町地区

万字線鉄道公園  
朝日開基100年記念碑

『記念の碑』

碑文

この記念碑は、明治29年 四国徳島より伊勢与利蔵氏他7世帯（41人）が入植、二抱えに余る巨木が連なる原生林との死闘は筆舌に尽くしがたく、今あらためて100年の歴史をひもとき、先人の苦労を偲びつつ、あらゆる難事にも屈することなく今日の「朝日」の礎を築かれたその「勇気」と「断行」を賛え、これから先も永遠に彼等の「開拓魂」が私達の子孫に強く深く伝承されることを祈念して建立しました。

平成7年10月29日

開基100年記念事業協



朝日神社境内

朝日炭砒記念碑

碑文

昭和四十九年十一月 朝日炭砒六十余年の歴史をここに閉じる閉山十年を卜し殉職者四十有余柱の霊を慰め記念の地にこの碑を建立する

昭和五十九年五月 野村 健二 書



## 万字線鉄道公園

### 記念碑 国鉄万字線朝日駅跡

### 旧駅舎・蒸気機関車(B201)

### 線路等の資料

#### 碑 文

大正三年十一月十一日、室蘭線志文駅より分岐する万字線（志文～万字炭山間）が開通し、朝日駅が開設される。日本国有鉄道経営再建促進特別措置法に基づいて、昭和六十年三月三十一日で廃止となり、七十余年の歴史を閉じるにあたり、万字線の果たした役割を後世に残すため建立するものである。

昭和六十年十一月十一日

岩見沢市長 国 兼 孝 治



## 栗沢町美流渡地区

### 美流渡コミュニティセンター敷地内

### 記念碑

### 国鉄万字線美流渡駅跡

#### 碑 文

大正三年十一月十一日、室蘭線志文駅より分岐する万字線（志文～万字炭山間）が開通し、美流渡駅が開設される。日本国有鉄道経営再建促進特別措置法に基づいて、昭和六十年三月三十一日で廃止となり、七十余年の歴史を閉じるにあたり、万字線の果たした役割を後世に残すため建立するものである。

昭和六十年十一月三十日

栗沢町長 中 山 稔



### 美流渡八幡神社境内

### 北星炭鉱閉山拾周年記念

### 『石炭之碑』





碑 文  
美流渡地域 石炭の歴史  
国鉄万字線は、大正三年に開通

当地区の炭鉱は、石狩炭田に属し明治時代に発見。好況時は沿線に十二の炭鉱があり、昭和三十七年には、各坑合計で、従業員一千九百五十人、年間出炭量四十五万三千屯、その後他のエネルギー源の進出に押された石炭産業は縮小をたどり、特に昭和四十四年の北星炭鉱の閉山は地区住民に重大な影響を及ぼし多くの人が転出した。美流渡地区の人口は昭和三十五年一万二千二百八十七人（美流渡町内八千九百四十五人、奈良町他三千三百四十二人）が現在二千三百九十七人（美流渡町内千九百八十七人、奈良町他四百十人）と激減し二十年間で五分の一以下となった。北海栗沢炭鉱北星炭鉱閉山（他炭鉱も含む）十年後の盃蘭盆に旧転出者二百余人をお迎えし美流渡中学校で記念会、懇親会を行って旧交を温め、先人の偉業を称え、閉山当時を回顧し地域の再開発を祈念して「石炭之碑」を除幕した。

昭和五十四年八月 建立

北海道知事 堂垣内 尚弘 書  
北星炭鉱閉山拾周年記念会

上美流渡地区 栗沢工芸館敷地内

植村貞吉氏之記念碑

記念碑再建ノコトバ

昭和五年 秋 栗沢村第十八区住民一同

植村貞吉ハ若イ頃ヨリ美流渡シコロノ沢ノ一千町歩ノ植村農場ノ開拓経営ニ長年努力シ成功ヲオサメ地域ニツクシ学校ニモヨク寄付ヲシテイマシタ。タマタマ昭和初期ノ経済不況ニ際シ、美流渡ニテ約7百名前後ノ従業員ヲ有スル奈良炭鉱ガ経営難ニオチイリ失業者増加ノ怖レガ村内ニ生ジ、当時ノ栗沢村長山田勢太郎氏ガ娘婿ノ貞吉ニ炭鉱ノ救援ヲ頼ミマシタ。貞吉ハ父母親戚ニ相談シマシタガ反対サレテ大イニ苦シミマシタ。然シ目前ニ多クノ人々ノ米塩ニモ困リツツアル苦悩ヲ見ルニ忍ビズ農場ヲ売却シソノ全私財ヲ投ジテ炭鉱ヲ救済スルコトヲ決意シマシタ。全農場民ノ愛惜ト第十八区住民ノ友情カラ農場内ニ流レル川ヨリ一人一人ガ石ヲ拾イ記念碑ヲ建テテクレマシタ。然シコノ碑モ六十年近イ風雪ニ文字ハ薄レ昔ノ姿ハナクナリマシタ。父ハ国ヲ愛シ国事ニ主力ヲツクシ、シベリア満州両事変ニモ出兵シ戦前郷軍ヲ代表シテ昭和天皇ヘノ御前講演ノ栄ニ浴シ今次ノ大戦ニハ老齡ノ身デ北千島ニ出兵シ発病帰還シ昭和二十四年七月十五日自宅ニテ安眠、年齢五十六才陸軍大尉 父ノ遺徳ヲタタヘ石碑ヲ建テテ下サッタ人々モ今ハ故人、ソノ御冥福ト御子孫ノ御繁栄ヲ祈ルト共ニ石碑ノ移設保存ニ御尽力下サッタ方々ニ感謝シテココニ父ノ石碑ヲ再建致シマス。



平成二年五月吉日

東京都 植村技研工業（株）  
取締役会長 植村 貞吉 長男 厚一（七十一才）

## 毛陽町地区

ミルトマップの沢 幌向川ダム湖畔

### 幌向川ダム碑

#### 事業概要

この地域は、石狩川水系幌向川及びその支流の山間に広がる自然条件に恵まれた米作地帯です。しかしながら今日まで、大型基盤整備事業の恩恵を受ける事も少なく、隣接している空知中央地区が2次改良であるのに比べて地区内の大半は未整備地帯であると云えます。現況の水利用は、幌向川を水源とした金子頭首工の他、小溪流を堰止めた溜池と雨水利用の皿溜が数多く点在しています。計画では不足水源を確保するため幌向川支流にダムを新設、下流2ヶ所の頭首工から取水し、慢性的な水不足を解消しながら更に近代的な農業経営の確立を目標とした用排水の分離、代掻期間の短縮、深水の確保等を図ります。又、畑地についてもかんがいを行い生産性の向上を目指します。



## 大平会館敷地内

### 開基百年記念碑

#### 『開拓之碑』

#### 碑文

明治三十年富山縣からの入植者が、小作人として群馬農場に入植、その後、明治三十八年 万字炭鋤開鋤により、明治三十九年に東井長次郎、背戸田吉蔵、背戸田興蔵、早川庄蔵、山崎長蔵が、大平の地を開拓し定住、りんごなど果樹や野菜類、雑穀を作付け、炭鋤に働く人達に販売し暮らしの糧としていたものである。

昭和十年頃の最盛期には、戸数三十戸を超えたが、万字炭鋤の閉山や、農業の変化により、今日では戸数十数戸を数えるに至っている。ここに、大平郷土百年を迎え、開拓の碑を建立し、先人の労苦を後世に伝えるものである。

山崎木材



## 栗沢町万字地区

### 山神社境内

### 御大典記念石段





## 山神社境内

### 西原翁開村高德碑

西原文治、万字最初の移住者。碑は炭山神社境内右手に建立、万字開拓の功績を讃え大正八年に有志の手によって建立されたものである。明治三十八年八月、北炭が万字鉱開坑準備に着手する際、同社より諸施設の建設、土木工事を請負、現在の二見、相生沢調査時にポンポロムイ川岸より鉱泉の湧出を発見、明治三十九年二階建ての温泉場を設け、西原温泉と呼ばれ大正末期まで繁盛した。碑文によれば寡黙力行の人で仁義に富んだ人柄であり昭和二年四月、六十七才で病没。

#### 碑文

翁本姓佐藤名文治考柳助妣西原氏曰紋萬延紀元生盤城相馬郡小高町太井後冒荷市原資性温厚且慈祥也明治二十一年蹶起立志渡北海道従炭鉱汽船会社等之請託業博巨利遂移居於幌内謀炭鉱界之発展未出世埋没深山幽邃之間空如埃識者明治三十八年八月翁有見所单軀分林越躋茅篾百難千苦葵見万字炭鉱脈豊裕雖不如夕張幌内双鉱炭質佳良於前途国家有益亦可知矣天佑哉翁踏查攀躋之際認温泉二見沢設浴槽充客人呼曰西原温泉浴之宿痾頓瘥土着之詆月從年倍遂至称七縣村嗚呼又懿哉孔子曰德不孤必有隣古聖不欺人如若矣翁又有公共心損私財開棧道投家屋充覺堂不数年无人僻陬之境忍化一大部落此地寒甚吹烟不颺矧於万字二見沢熊羆狐狸之窟微翁豈可望今日之隆乎柳士能一事者可談予未面識翁矣弟賢治者知己也彼咄辯力行人翁稟厥系血堅忍不撓可想也七縣村有志慕翁之德樹碑永欲貽不朽遥寄柬請文於予々義弟牛渡央頼翁之扶翼得艱家族誼不可辭繹稿索草叙其梗概云系曰二見沢万字之麓靈境温泉四季无絶九死頭甦是因翁德



大正八年己未九月上浣

盤城節堂 齊藤 義雄 撰  
須子 寛爾郎 謹書

## 万字交流センター敷地内

### 記念碑

#### 『国鉄万字線万字駅跡碑』

#### 碑文

大正三年十一月十一日、室蘭線志文駅より分岐する万字線（志文～万字炭山間）が開通し、万字駅が開設される。日本国有鉄道経営再建促進特別措置法に基づいて、昭和六十年三月三十一日で廃止となり、七十余年の歴史を閉じるにあたり、万字線の果たした役割を後世に残すため建立するものである。



昭和六十年十一月三十日  
栗沢町長 中山 稔

## 国鉄万字線万字炭山駅跡地

### 記念碑

#### 『国鉄万字線万字炭山駅跡碑』

##### 碑文

大正三年十一月十一日、室蘭線志文駅より分岐する万字線（志文～万字炭山間）が開通し、万字炭山駅が開設される。日本国有鉄道経営再建促進特別措置法に基づいて、昭和六十年三月三十一日で廃止となり、七十余年の歴史を閉じるにあたり、万字線の果たした役割を後世に残すため建立するものである。



昭和六十年十一月三十日

栗沢町長 中山 稔

## (6). 栗 沢 町 地 域

### 本 町 地 区

#### 中央公園

#### 開村五十年記念碑 『恩 聖』

##### 碑文

栗沢村ハ開基以来星霜五十年ヲ閲シテ偉大ナル発展ヲ見現在広袤十四方里戸数参千五百人口二万ヲ抱擁シ総生産額九百五十余万円ニ上リ今後益々発達ノ機運ニ在リ今此開発ノ沿革大要ヲ叙スレバ明治十九年札幌ノ人柴田与次右衛門ハクッタリニ同二十年山田倉之助外数名ハ幌向川沿イニ未開地貸下ゲヲ受ケタリ同二十三年四月和歌山県人山田勢太郎モ亦同地方ニ於テ貸下ヲ受ケ数戸ノ小作人ヲ伴イテ移住シ開拓ニ従事セルヲ本村農業経営ノ嚆矢トス同年七月岐阜県人大野亀太郎外一名ハ夕張川沿イニ札幌ノ人後藤半七ハクッタリニ貸付ヲ受ケ開墾ニ従事ス此ノ歳室蘭線鉄道工事進涉シクッタリ地方ニ一小部落ヲ形成シテ其数四十戸ニ達ス明治二十五年二月一村新設シテ栗沢村ト命名セラル同二十六年五月富山県人本田幸彦ヲ団長トスル砺波団体岐阜殖民社農場滋賀県人河路重平ノ必成社農場村上宗一ヲ団体長トスル備後団体其ノ他富塚農場坂東農場富山団体等相次デ来往シ戸口日ニ増加シ明治三十年四月戸長役場ノ設置ト共ニ独立ノ基礎ヲ固メ明治三十八年万字砦ノ起業ニ依無限ナル宝庫ノ開発ヲ見同三十九年四月二級町村制ヲ施行セラレ村政ノ刷新改善ニ因リ諸般ノ事業愈々進涉シ太古以来荒涼タル荊榛ノ地モ穰穰タル美田良圃ト化シ村農会産業組合土功組合商業組合其ノ他教化修養ニ関スル各種団体ノ施設モ亦機宜ニ適シ商鉞工業ノ発達ト相俟テ村勢隆々今日ノ繁栄ヲ致セリ殊ニ産業ノ振興交通ノ発達教育文化ノ向上等異数ノ進運ヲ見タル所以ノモノハ終始一貫村治ノ要諦ヲ報徳ノ真義ニ則リ心田ノ開拓勤儉力行ヲ村民ノ信条トシ挙村一致和衷協同シテ実績ヲ挙績スルニ努力セルノ結果ニシテ昭和十一年十月畏クモ天皇陛下陸軍特別大演習ノ御統監並ヒニ各地御巡幸遊バサレシ機会ニ特ニ侍従御差遣





ノ栄光ニ浴シ同十三年四月自治制発布五十周年記念式ニハ内務大臣ノ表彰ヲ受ケ大ニ名声ヲ發揮スルニ至レリ顧フニ本村開基ノ際ハ北海道拓殖草創ノ時代ニ属シ爾来幾變遷ノ間各種ノ公共事業ニ父祖先輩ノ苦心經營セラレタル顕著ナル功績ハ実ニ永久誦ベカラザル一大教訓ナリトシ此ノ絶大ノ遺徳高風ヲ欽慕シテ報恩感謝ノ微衷ヲ表シ茲ニ開村五十年ヲ記念シ其ノ来歴ノ梗概ヲ貞琅ニ勒シ以テ之ヲ後昆ニ伝フルモノナリ

元内務大臣海軍大将 末次 信正 閣下 篆額

## 中央公園

### 栗沢町開基九十周年記念像

#### 『 緑と太陽の像 』

この像は未来に向かって躍進する栗沢町が、緑豊かな自然と輝く太陽のもとで、田園福祉都市をめざし互いに手をつなぎ立ち上がった姿勢を象徴しているものです。

昭和五十七年八月

栗沢町長 中山 稔



## 中央公園

### 消防記念碑

#### 『 義勇奉公 』

#### 『 炎と闘い水と闘い ここに百年 』



### 真布消防組沿革

公立清真布消防組ハ明治三十五年六月十八日設立認可セラレ同年七月十一日創設式ヲ行フ爰ニ、紀元二千六百年奉祝ノ記念ト共ニ故人先輩ノ功績ヲ偲ヒ団員一致協力益々警防精神ヲ涵養シ奉公ノ誠ヲ効カサント期ス

北海道庁警察部長 齋藤 亮 書

## 中央公園

### 道営圃場整備事業

#### 北斗・越前地区竣工記念碑

##### 『沃圃豊饒』

###### 碑文

当地は栗沢町の西部に位置し明治二十六年頃より幾多の困難と風雪に耐えて開拓され麦類、豆類を主体とした畑作地帯であったが、立地条件が稲作に適していることが有志により立証され明治後半より開田され、今日の水田経営の基礎となった。しかし、その後増田に伴う用水不足、泥炭土質のため生産力はきわめて低く不安の星霜が続くなか、国営、道営、団体営等によるかんがい排水事業、道営による軌道客土事業が順次計画実施され生産性の低かった水田が肥沃な水田となり安定した農業経営の向上が図られた。この様に各種土地改良が続けられたが、水田の区画形状が開田当時の小区画に加えて用排水路が分離されていないことから湿田のため大型農業機械導入に支障を来す状況の中で、土地基盤の整備が急務として要望され、昭和五十年年度北斗地区、昭和五十一年度越前地区が道営による圃場整備事業として着手され以来十余年にわたり大区画の構成と共に用排水路、幹線、支線農道の整備、暗渠排水等の施工によって汎用化が図られ併せて農地の集団化など、ここに新しい時代に即応した農業基盤が確立されたのである。この事業実施に当たっては農林水産省をはじめ各行政機関と各農業団体の指導、ご協力、地元関係者の熱意に対し深甚なる感謝の意を表し農業者としての使命達成を誓うものである。ここに先駆者各位の労苦を偲び記念碑に其の事実を刻し後世に継承する。

昭和六十二年秋

北海道知事 横路 孝弘



## 北本町 清真寺境内

### 開基記念の碑 『化普僧』

#### 碑文

抑も清真寺は明治二十八年原谷魏城師が必成社農場の請を容れて其の前身幸穂説教所を開設せられたのに始まり、同三十年十月公認せらるに及び郷里石川県羽咋郡稗造村より原谷実師を招聘。協力して布教の任に衝らる当時未開の広野に苦闘し兎もすれば荒まんとする人心を鼓舞激励せらる。偶同三十一年一月魏城師逝去後、遺緒を継ぎ布教の傍寺子屋を開設して児童教育に挺身幾多の困難を忍びつつ懇闘の大業寄与せらるる所尠なしとせぬその間寺院の建立を計り本堂庫裡の新設を劃されたるも容易に成らず、けれど師が不断的努力は酬いられ河路、鈴木、藤井、西川、中島、笠原の諸氏と檀家信徒の協力により明治三十五年八月議なり現在の地を相して工起し同年十二月竣工超えて明治四十年七月待望の寺号公称に衆生済度の殿堂を確立多年の念願を成就した。爾来一層布教と内容充実に努められ即ち必成社より土地5町歩の寄付を受け基本財産の造成を見大正八年梵鐘鐘楼堂昭和七年納骨堂の建立により内外共に完備するに至った。しかるに師は不幸晩年眼疾に悩ま





れ健康亦勝れず昭和八年十一月二日遂に大往生を遂げられる。法名、清真寺釈実念本年將に十七回忌の勝縁に当り開基往年の功勞を偲び碑を樹て蹟を勤して後昆に伝えんとするものである。

昭和二十四年十一月二日 これを建つ

### 栗沢病院敷地内

#### 侍従御差遣記念碑

昭和十一年十月五日御使者岡部侍従を御差遣  
あらせらる仍つて碑を建て永く之を記念す

昭和十二年十月五日

空知支庁長 従六位勲六等  
永山 政能 書



### 市役所支所敷地内

#### 顕彰之碑

##### 碑文

明治二十五年二月四日岩見沢村から分村して栗沢村が開村され、以来百年の星霜を経て、今日まで発展を遂げて参りました。ここに開基百年を記念して歴代首長の名を記し、顕彰の碑を建立する。

平成四年十二月

栗沢町長 山田 晃 睦



### 栗沢中学校東側国道沿

#### 侍従御展望記念碑

昭和十一年十月五日御使者岡部侍従を栗沢村に御差遣の砌此の所に於いて青年訓練の状況を御覧あらせらる仍つて碑を建て永く之を記念す

昭和十二年十月五日 建立

栗沢村青年団員  
栗沢村青年学校生徒



## 北幸穂公園

### 水田発祥の碑

#### 碑文

滋賀県長浜町の河路重平・西市市太郎翁が、北海道に農場開拓の大志を抱き「必成社」を創立。現在の必成・幸穂・栗沢本町を含む五百町歩の土地貸下げを受け、明治二十六年（一八九三年）農場開設と同時に九戸が南畠（南幸穂・南本町・幸穂町）に入植し、畑地の他に北畠（北幸穂）の西を流れる細流を利用して水田七反歩を造田試作したのが、栗沢町に於ける稲作の始まりである。また時の滋賀県知事大越亨がこれを聞き、その前途を祝しこの周辺を「幸穂」と名付けた。「水田発祥の地」は、この碑の西方で最上川の左岸に位置する。星霜ここに百有余年多くの先人先輩が想像を絶する苦難に堪えながら、今日の豊穰なる美田良圃の礎を築かれた偉業を讃え深く敬意と感謝の誠を捧げる。

平成十二年五月 建立

北幸穂 森 繁雄  
南幸穂 前川 英雄



## 市役所支所敷地内

### 山田勢太郎翁像

高井 旺堂 撰書

#### 碑文

山田勢太郎翁は慶應三年六月一日和歌山市に生れ明治二十三年三月北海道空知郡栗沢村に移住し当時開拓草創の際苦心経営理想郷の建設に務め明治四十二年七月同村長に就任以来常に報徳道を信条とし二十有三年間教育に産業に其他 諸般の公共事業に盡瘁殊に男女青年団の指導訓育に励精し 又道政枢要の公職を兼ね至誠一貫遂に模範村に達成せられたる等其高德と偉績とは洵に世の典型として長へに之を後昆に伝へる許るへからさるなり

昭和十年六月 建立 昭和二十五年九月 再建



## 栗沢神社境内

### 墾田之碑

#### 碑文

本組合地区ハ栗沢村原野ノ内肥沃ノ地一千五百町歩ヲ包含ス 其ノ開拓ハ明治二十三年ニ始リ爾来畑作ヲ連続セル為地力減耗ヲ來シタルト村将来ノ為 夕張川ニ於ケル水利権ノ獲得ヲ痛感シ明治三十六年ノ頃前途ヲ憂慮セル本田栄三郎氏ハ水田ニ開発スルヲ最善ノ策ナリト確信シ之





ヲ村會議員並ニ有志者ニ謀リ 北海道廳ニ陳情スル等日夜寢食ヲ忘レテ努力セラレ 明治四十一年十月二十二日關係地主大会ヲ開キ其ノ期成ヲ決議シ委員ヲ舉ゲテ適切ナル調査方ヲ申請シ半歳ニ亘リ精密ナル實測設計ノ結果引水可能ナルヲ確メ 土功組合設立ヲ企圖スルコトナレリ 茲ニ於テ本田榮三郎 山田勢太郎 河路重平ノ三氏ヲ創立委員ニ舉ゲ組合設置ノ申請ヲ為シ 明治四十三年一月三十一日長官河嶋醇閣下ヨリ認可セラレ 金七萬七千圓ノ地方貸付資金ト金一萬圓ノ地方費補助ヲ得 組合員欣喜シテ工事ノ実施ニ着手シ 第一期計劃一千町歩ニ對スル灌溉施設ハ明治四十五年三月其ノ完成ヲ見 同年五月八日幹線延長五千七百七十四間ノ初通水ヲ行ヒ越ヘテ第二期工事ハ大正四年八月着手シ大正六年三月ヲ以テ竣成シ新ニ三百町歩ヲ加ヘタリ 次テ揚水機ニ依ル二百町歩ノ擴張ハ大正十三年度ニ於テ竣功シ 前後總工事費三十四萬三千餘圓ヲ投シテ當初計劃ノ一千五百町歩造田ヲ完了セリ 顧フニ此ノ計劃以來四十年 組合設置ヨリ三十餘年幾多ノ困難ニ遭ヒシモ不撓不屈素志ヲ貫徹セルハ實ニ前記三氏ヲ始メ 役職員議員組合員ノ至誠一貫セル勞苦ノ多大ニシテ最近年額三萬石ノ良米ヲ生産ス 今ヤ創立三十年ニ當リ茲ニ記念碑ヲ建テ其ノ功績ヲ後昆ニ傳フルモノトス

昭和十六年十一月

北海道廳 事務官 從六位勲六等 高井 幸次郎 撰並書

## 栗沢神社境内

### 神社移転合祀記念碑

我栗沢村民風淳厚敬神念厚矣明治二十七年五月村内字三部住民為開拓守護神造宮社殿鎮齊天照大神奉称栗部神社創立以來社章田頭和左衛門功績頗多大矣先是二十七年五月必成社長故重平於現地營造社殿奉祀札幌神社大国主命尋四十年十一月遷齊近江長浜八幡分靈栗部神社共移轉為合祀改称栗沢神社大正八年九月十六日昇格村社於爰遂民子多年宿願其緣由刻石為記念

大正十年九月十九日 建之



## 栗沢神社境内

### 御大典記念灯籠

昭和三年十一月十日 建立



## 栗沢神社境内

### 静念の池

往年の青年が精神統一の為ここにあった池を、その場と定め記念碑を建てたものと思われる。

栗沢村青年団必成支部 建立  
建立期日不明



## 栗沢神社境内

### 御大典記念碑

#### 『大正天皇崩御記念』

昭和三年十一月十日 建立



### 奉公綬受彰記念碑

#### 『教育勅語御換発四十年記念』

栗沢村青年団必成支部 昭和七年九月 建之



## いわみざわ農協栗沢支所敷地内

### 産業組合創立記念碑

#### 碑 文

保証責任栗澤信用購買販売利用組合ノ創立ハ大正七年九月ニシテ當時政府ハ米價暴落ニ対シ農村救済策トシ農業倉庫法ヲ発布シテ普及ニ努メラル此ノ機會ニ農村會長本田栄三郎氏發起人トナリ之カ経営ノ産業組合設立ヲ主唱シ同志者多数ノ賛同ヲ得既設ノ砺波岐阜茂世丑由良ノ四組合信用販売事業ヲ変更シ同年九月新ニ保証責任栗澤信用購買販売利用組合ノ設立ヲ完成シ組合員六百六十二名出資数二千九百八十口第一回払戻金五千九百六十圓ニシテ翌八年八月第一倉庫ヲ建築シ爾來業績順調ニ進ミ同十二年専務理事本田栄三郎氏ハ農村衰頽ノ恢復策ハ更ニ購買及ビ利用事業ヲ追加セリ強力ナル四種事業運営ニ在リ





トシ浅野友吉赤松清一郎川原重信ノ三氏ト協力シ既設四組合ヲ解散合併シ有限責任栗澤信用購買販売組合ト改稱シ茲ニ全ク産業組合トシテノ体制ヲ整へ同年購買事業ノ六配給所本道ノ嚆矢タル利用事業ノ精米蹄鉄業務ヲ開始ス爾後専ラ組合員ノ加入ト出資ノ増加ニ努メテ事業益々拡張シ其ノ成績良好ナルヲ認メテ大正十五年産業組合中央會北海道支會ヨリ表彰サレ役職員更ニ感奮興起シ組合員モ亦能ク理解シ組合ノ基盤愈々堅実ヲ加へ昭和六年現在ノ事務所翌七年第二倉庫ノ建設同十二年区域拡張ニヨリ美流渡支所設置翌十三年農産加工総合工場及万字配給所同十四年第三倉庫等相次デ建設セラレテ名實共ニ本道屈指ノ大組合トナリ同十五年産業組合中央會ヨリ優良組合トシテ顕彰ノ光荣ニ浴ス翌十六年東栗澤組合ヲ合併シ一村一組合トナシ現在組合員一千七百六十一名出資総額三十一萬八百圓自己資金三十萬圓余裕金九十萬圓ヲ擁シ重大時局下農村ノ振興ヲ計リ大政翼賛ノ実践ニ励ミ真ニ産業組合ノ使命達成ニ邁進スルノ現状ニ在リ今回組合創立二十五周年記念式挙行ニ當タリ其ノ沿革概要ヲ録シ以テ之ヲ傳フルモノナリ

昭和十七年九月

元産業組合中央會會頭 伯爵 有馬 頼 寧閣下 題額  
元北海道廳事務官従六位勲六等 高井 幸次郎 撰並書

## 必成地区

必成地域文化センター敷地内

### 必成社開拓六十年記念碑

#### 『 墾 關 之 碑 』

##### 碑 文

必成社農場ハ明治二十六年社長河路重平氏等数名北門開拓ノ大志ヲ抱キ地ヲ清真布ニ相シテ四百八十餘町歩ノ貸付ヲ受ケ故郷ヨリ移民二十戸ヲ入植セシメ開墾ニ着手ス太古以来ノ鬱蒼タル原始林茅葭丈ナス荒涼タル野ニ移民ハ熊羆跳梁ノ危険ヲ冒シ炎熱酷寒ト闘イ瘴癘ニ悩マサレ且サラニ辛酸艱苦ヲ嘗メ筆舌ニ尽クシ難キ困難ヲ克服シテソノ業ニ励ミ入植者増加ト相俟ッテ開拓ノ事業大イニ進涉シ明治三十七年畑地成墾ス爾來小作人年ト共ニ多キヲ加エ栗沢北海兩土功組合ノ設立ニヨリ三百六十五町歩ノ造田計画ヲ樹テ地主小作相協力シテ之ヲ完成シ客土暗渠排水等土地改良ノ事ニカヲ注キ数度ニ亘ル水冷害及ヒ病虫害ニ克ク対処シ遂ニ穰穰タル美田良圃ト化スニ至レリココニ於テ必成社ハ国家ノ富強ト民人ノ福利トヲ希求スルニ起業趣旨ニ則リ昭和三年ヨリ遂次自作農ヲ創設シテ昭和二十年ニ至ルモ今次農地調整法ノ施行ニ伴イ残余ノ面積百七十町歩ノ土地ハ昭和二十四年ヲ以テ全ク開放ヲ了セリ顧フニ本道農業経営ハ幾多ノ変遷アリタルモ当農場ハ河路氏ノ遠望深慮ト小作人ノ勤儉力行不屈ノ闘魂ニヨッテ今日ノ成果ヲ贏チ得タモノト言ウベシ茲ニ來歴ヲ梗シ以テ後昆ニ傳ウルモノナリ



昭和二十六年十月 建之  
平成二十二年八月 移設

## 必成地域文化センター敷地内

### 必成開基百年記念碑

#### 『百夢必達』

##### 碑文

滋賀県人河路重平は、北海道開拓の大きな夢を抱き、必成社を創設、その命を受け同県人西田市太郎は綿密な調査の末、明治二十六年この地清真布に同志と共に主監として入植、以来四回に亘り農家三十六戸が入植し、開拓の基礎を築いた。この間北海道の自然の猛威や野獣との戦いなどその難苦は言語に絶した。しかし、不屈の開拓魂と相互扶助の



同志の結合により名実ともに融和で美しくも実り豊かな田園必成が形成され、本年茲に百年を迎えた。先人達の血涙しぼる粒々辛苦を偲び、その労苦に誠を捧げ併せてこれを永久に後世に伝えるとともに、必成の新たなる飛躍を誓い次代を担う若人達が未来に向けて限りない夢の実現を希い茲に百夢必達の碑として建立する。

平成五年八月吉日 建立

平成二十二年八月 移設

栗沢町必成開基百年記念事業実行委員会

北農中央会会長 三 沢 政 雄 謹書

## 自 協 地 区

### 自協神社境内

#### 五十年開拓記念碑

#### 『開拓碑』

##### 碑文

開拓以来星霜五十年ヲ閲シ今日ノ発展ヲ致セル当部落改革ノ一端ヲ叙センニ明治二十六年五月福井県人山口善五郎氏団体長トナリ有志ト共ニ入地未開地百九十町歩ノ貸下ゲヲ得即荆棘ヲ關キテ良圃ト化シ一小部落ヲ形成スルヤ故国ニ因ミ越前開墾ト称スルニ至ル此クテ人口増加ニ伴イ私塾ヲ設ケテ子女青年ヲ教養シ文化ノ制亦緒ニ就ク明治三十年本村戸長役場ノ設置セラルルヤ第九組トナリ後町村制ノ施行ニヨリ区制ヲ実施第五区ニ属ススクテ自治ノ基礎確立産業益々振興後栗沢北海両土功組合ノ創立ニヨリ水田造成面目一新ス昭和十五年十二月区制ヲ改メ自協部落ト命名セラルル顧フニ本道開発ニ垂レサセ給ヒシ聖慮ヲ奉戴シ草創開拓ニ苦心経営セラレタル父祖先輩ノ功績ハ永久勒ルベカラザルモノナリ茲ニ開拓五十年ヲ記念シ来歴ノ一端ヲ勒シ以テ之ヲ後昆ニ伝ヘントス



昭和十八年十月 建立



## 自協神社境内

### 開基百年記念碑

#### 『 自疆閱百年 』

##### 碑 文

昔、アイヌの人が、この地を走破したと言う伝説もあるが人が住みついて開拓に従事したのは明治二十六年である。以来ここに星霜百年艱難辛苦に堪えた山口善五郎氏外先人達の礎は大きく開花、豊かな田園福祉の野になった。自疆という呼び名も、行政区分割の折りに戊申詔書の中の「自疆」を取って、字名を自疆とした。大正初期の栗沢土功の完成によって、稲作が始まり畜力利用が進み、更に動力機械化し、生産物や営農形態、生活文化も大きく進歩した。天照大神を祀る神社は開拓当時の社殿から昭和十六年と、平成五年の二度新築し参道の灯籠、狛犬はそれぞれ先人の寄進によるものなり。境内中央の開拓の碑は五十周年、表面の社号標は七十周年、殉国慰霊の碑は八十周年の記念建立である。集会所は大正五年の自疆クラブに始まり、昭和二十一年と四十四年会館として装いを新たにし、地域の社会教育の場としても機能して今日に至る。昭和四十六年桃川、沼川の下流地点に内水排除の機場が竣功して低地帯は洪水から免れるようになった。時を同じくして圃場整備事業が始まり長方形の大型田区画され、大型機械化、近代化が急速に進んだ。加えて営農団体の設立によって農業の構造が一変し生活様式も都市に劣らぬ恵まれた環境を作り出したのである。ここに、開基百年を迎えるに当たり社殿の新築と、若連中の古墳移転修復「自疆閱百年」記念碑を建立し、この地に住む百五十余名挙げて先徳の礎に思いを致し二十一世紀に飛躍せんことを誓う。

平成五年十一月

北農中央会会長 三 沢 政 雄 謹書  
自協開基百年記念協賛会



## 自協神社境内

### 一ノ矢与一郎氏追悼碑

#### 『 越前開墾中 南無阿弥陀仏 』

越前開墾（自協、越前町会の旧呼称）が、明治二十六年の入植で当時これと云う娯楽のない時代で、神社の春秋のお祭時の力自慢相撲が何よりの楽しみであった。その相撲で大関格でいつも相撲で中心的役割を果たしていた一ノ矢与一郎氏が死去され、一ノ矢氏の遺徳を偲んで建立した碑である。

明治三十三年九月八日 建立



## 砺波地区

砺波神社境内

道営土地改良総合整備事業

砺波地区竣工記念碑

『恒沃豊郷』

碑文

この地に開拓の鋤が打ち下ろされてから、早一世紀を迎える。大正二年に造田がなされ、爾来五十年、農業の選択的拡大、専門化、大型化が提唱される中、昭和四十一年～二年度に農業改善事業、昭和四十六年～七年度には、道営圃場整備事業が相次いで実施され、圃場の大型化、農道、用排水路の整備、暗渠排水等の施行により、大型農業機械の導入、稲作の一貫体系が確立され、農業の近代化と生産性の合理化による農業経営の安定向上が計られた。その後、米の過剰基調による生産抑制的な対応を余儀なくされ、更に生産性の向上を目指し、農業機械の田面踏圧による表面停滞水の排除、地下の透水性を高め農用地の汎用化を計るべく、道営土地改良総合整備事業による再整備が急務として要望され、この目的達成を願い、砺波栗部及び周辺地域を含めた同志相集い、昭和五十七年一月期成会を設立、翌年度には着手の運びとなり以来七年、本事業計画に基づく浅層暗渠排水、用排水路、幹線農道等の竣工をみた。この事業実施にあたっては、農林水産省をはじめ、各機関団体の御指導、御協力、地元関係者の熱意に対し深甚なる感謝の意を表し、これらを礎にして広汎な農産物供給基地として、肥沃な大地を活用した恒久的な稔り豊かな郷づくりを実現すべく、農業者としての使命達成を誓い、ここに先駆者各位の労苦を偲び、次代に引き継ぎ後世に永く伝えるものである。

着工 昭和五十八年 竣工 昭和六十四年 建立 昭和六十三年秋

砺波地区土地改良総合整備事業促進期成会



砺波神社境内

記念碑 『本田 幸彦 頌徳碑』

碑文

本田幸彦君富山縣西礪波郡廣瀬村坂本人興四右衛門長子家世農明治二十六年君興郷人謀為團體移住本道乃請官受空知郡栗沢村幌向原野五百四十町歩以五月一日同從者百八人是為礪波開墾地君為人質直而香好義接人無圭角故為衆所推服焉始到此地棲奔翳蒼熊出没人多懷郷而君率先督励不憚困苦十五年如一日遂能成其業矣其改修河流開鑿道路疎通溝洫興學校建社寺皆君之力也官屢褒賞之今也田地肥沃家騰人給眞為一大樂土於是衆相謂曰吾修亨此幸福固雖出昭代餘澤抑亦因本田君之力其功績豈可得誼乎哉乃為樹碑勤兒其事以念後人微余文嗚呼創業之難已往矣守成亦不易也凡為團體者相興輯睦益勉其業不忘當年之艱苦則庶幾得遂其終乎

明治四十一年三月

湘香道人 新居 敦 撰

農学博士 佐藤 昌介 題額 常本 照憲 書





## 砺波神社境内

### 山本 榮太郎 碑

故山本榮太郎氏ハ生家代々農ヲ以テ襲フ。父ハ幸次郎、越中國西礪波郡西野尻村ニ生ル。資性温順夙ニ青年ノ模範タリ。明治三十五年十二月一日徴サレテ第七師團ニ入營シ、爾來忠實軍務ニ服シ亦、有材ノ聞アリ。後チ抜擢セラレテ工兵上等兵ニ進ム。干涉明治三十七年二月十日、日露ノ和破ルルヤ同年十月二十四日、奮然起テ外征ニ嚮フ。同月二十七日旅順附近ニ竜山松樹山攻撃ニ加ハル。同年十二月五日夫ノ難攻不落ト宣伝セラレタル旅順港二〇三高地ノ激戦ニ参加シ、戦闘中敵弾ヲ負ウ。越テ三十八年七月十日、負傷ニ因リテ戸山分院内ニ歿ス。噫氏ヤ曠古ノ國難ニ殉シタリ。寔ニ名譽ノ極ミト謂フベシ。仍テ居村砺波青年団員相議リテ、氏カ畧歴ヲ叙シ以テ其ノ功績ヲ永ク萬世ニ傳頌ス矣



明治四十四年四月

## 砺波会館敷地内

### 砺波部落開基百年記念碑

#### 『輝礪百望』

##### 碑文

明治二十六年、富山県東、西砺波郡より移住した百八戸の先達により人跡未踏、熊笹等繁茂する原始林、熊等猛獣禽跋扈の中、開拓の鋤を入れたのが歴史の始まりとされている。開拓の辛苦は想像を絶し筆舌に尽くし難く、今なお語り継がれている。私共の父祖先人は、強固なる信念のもと一心同体となり、未来の幸福と繁栄を希求し、冷災害など大自然の試練と幾多の苦難の中で天地の恩恵を信じ心血を注ぐ努力を重ね、現時の基礎を築かれたのである。爾来、風雪に耐えて、ここに砺波部落開基百年を迎えるに至ったのである。この輝かしい年に当たり、先人の偉大なる業績を偲び、その労苦に対し深甚なる感謝とその強靱なる開拓精神を継承し、これを二十一世紀へ伝承責務を自覚し、今日生きる私共は自らの進展を期すべく日々精進しなければならない。眼前の怒涛の如き激変に幻惑されず常に千古不易なる開拓精神に想いを馳せ、さらに、後世に伝えるために、部落内外の総力を結集し、ここに記念碑を建立する。



平成五年九月五日

砺波部落開基百年記念実行委員会

北海道開発庁長官

北 修 二

## 砺波会館敷地内

### 開拓五十周年記念碑

#### 碑文

礪波団体ハ明治二十六年五月ノ創立ニシテ当初本田幸彦氏ノ斡旋尽力ニヨリ富山県東西両礪波郡ノ住民百八戸ヲ誘導シテ団体組織ヲ成立シ之カ団長トシテ北海道未開発地貸下ヲ出願シ苦心運動ニ努メ各自五町歩ノ認可ヲ得翌四月迄ニ全戸現地ニ移住ヲ完了セリ当時北海道ハ拓殖草創ノ時代千古斧鉞ノ入ラサル原始林荒蕪地ニシテ熊羆狐狸ノ跋扈ニ委ネタルカ団体員一同ハ櫛風沐雨經營慘澹ヲ極メテ明治三十一年ニ至リ全部畑地ニ成墾シ無償附与ノ恩典ニ浴シ爾後本田栄三郎氏ノ熱誠ナル首唱ニ因リ栗沢北海両土功組合ノ設立ト共ニ今ヤ到ル処美田良圃ト化シ尚ヲ同氏ノ指導誘掖ニ依リ何レモ精神ノ作興風紀ノ改善勤勞ノ力行ニ励ミテ和協一致ノ結果全道屈指ノ模範部落タル実績ヲ見ルニ至レリ今茲ニ本団体創立五十周年ノ佳辰ニ当リ部落民相謀リテ報恩感謝ノ誠衷ヲ表シ此ノ記念碑ヲ建設シ其ノ来歴ヲ勒シ誓テ永久ニ之ヲ緩レス以テ後昆ニ傳フルモノナリ

昭和十八年十二月十三日

北海道帝国大学総長 從三位勲二等 今 裕 額書  
從六位勲六等 高井 幸次郎 撰並書



## 砺波会館敷地内

### 御使御差遣記念碑

#### 碑文

昭和十一年十月 天皇陛下陸軍特別大演習御親裁ノ為メ大鳳輦ヲ北州ニ進マセラルニ當リ、本支部ニ御使御差遣ノ天恩ヲ拝ス 眞ニ我支部永劫ノ至榮ニシテ恐懼感激ノ至リニ勝ヘス 茲ニ皇恩ヲ永遠ニ仰カンカ為メ謹ミテ本碑ヲ建設ス

昭和十一年十月五日 勅使御差遣

昭和十二年五月一日

北海道廳官 池田 清 謹書  
栗澤村青年團砺波支部 建之



## 砺波揚水場敷地内

### 砺波揚水機創設記念碑

#### 碑文

抑本組合ハ元来栗沢土功組合ノ区域ナリシモ、創設当時実測ノ結果、自然灌漑不可能ナルヲ以テ除外セラル。然ルニ新十津川村ニ於テ、水車灌漑設置ノ實況ヲ見聞シ、水車揚水ノ可能ナルヲ知り、本組合区域モ水車揚水ニ依リ灌漑スル目的ヲ以テ区域ニ編入セラル。而シテ幹線約六百間ニ水車二十一臺ヲ架





設シ、灌漑反別約五十町歩ノ造田ヲナス。尔後繼續十一ヶ年其ノ間、水車ノ障害ト上流ニ於ケル肥土ノ沈澱ニ依リ水ノ流通ヲ防ケ、下流組合員ノ苦情続出シ、或ハ副線ヲ掘鑿シ或ハ数度ニ渉ル幹線ノ浚渫等水流ノ調整ヲ計リタルモ、尚円満ナル解決ヲ見ルニ至ラズ、其ノ苦境名状スヘカラサルモノアリ、茲ニ於テ本組合顧問本田榮三郎氏ノ唱導ニ依リ、電力揚水機ヲ設置シ新区域六十町歩ヲ拡張シ、コレニ相当ノ負担ヲナサシメ以テ水車ヲ撤廢スルノ議起リ、大正十二年工費一萬四千圓ヲ投シ、十馬力ノ電動カヲ以テみのくち式揚水機ヲ据付ケ灌漑スルニ、ソノ結果水量不足ニシテ灌漑意ノ如クナラズ、越ヘテ大正十三年更ニ新区域四十町歩ヲ加ヘ電動カヲ二十馬力ニ變更シ揚水機モ大型ニ改良シタリ。此ノ工費八千五百圓ニシテ新加入者コレヲ負担セリ。尔来成績良好ニシテ揚水量モ稍豊富、昔年ノ苦痛モ全ク打開サルルニ至ル 茲ニ於テ組合員一同ハ所期ノ目的ヲ達シ、衷心歎喜ニ耐エサル處ナリ、因テ本組合創設当初ノ起原ヲ摘録シ、以テ永久ニ記念セントス。

昭和十一年

## 砺波揚水場敷地内

### 開拓記念碑

明治二十六年五月仮貸付け許可後、砺波団体の先発隊数十名が、南八線東十号の地に到着し、二晩野宿して三間に五間の掘建て合宿小屋を建てた箇所に、昭和三年三十周年を記念して建てた碑である。

#### 碑文

明治二十六年五月一日、富山県西砺波郡広瀬村外六ヶ村ヨリ移住百八戸。団体長本田幸彦氏ト共ニ此地ニ仮小屋ヲ建テ合同仮住シテ、晝尚暗ク猛獣出没ノ森林ヲ伐採シテ各自ノ貸附地ヲ開拓シ、今ヤ斯ノ如ク美田ト化シタルハ、全ク移住者ノ堅忍不拔ノ精神ト共同一致ノ力ニ因ルモノナリ。

茲ニ其旧跡ヲ永遠ニ記念スル為メ此碑ヲ建設ス。

昭和三年 団体三十周年記念 建立

正三位勲二等 農学博士 南 鷹次郎 題字

団体長 本田 幸彦 書



## 常照寺境内

### 高田吉良平之碑

高田吉良平初名二四六越中國西砺波郡小坂村人明治三十四年從父來本道住栗澤後移角田父吉郎平以工匠為業特長于堂塔廟祠之造營本道社寺殿堂成于其手者甚多矣二四六於工芸有別才就父修業傍受諸家之教建築彫刻並以優秀被稱父沒後襲其名亦稱吉良平盜攻其技家聲頗揚遠近爭招之大正十四年十二月二十日出在沼田俄沒距其生明治二十五年九月二日享年僅三十四人皆惜之娶郷人加藤正一長女生一男一女共尚幼令茲丁卯春新属知友謀建碑囑余以誌銘乃案状叙之系以銘曰

江村山驛 殿堂巍然 工師不壽 遺功永傳

昭和二年三月十七日

清川 圓 誠 撰并書



## 東豊地区集会所敷地内

### 古木先生碑

#### 碑文

先生名莊藏古木氏號翠悟軒越中國砺波郡人也家世業農舊在郡之桐木郷先考世移福光街旁業醫由来為名族蓋藤原氏遠裔歟妣白山氏産二男一女先生為嫡子統家襲業後有故廢力圭矣以文久二壬戌年九月二十五日生幼而穎悟又克勉学自明治七年至九年随富山儒士石寄石昇修經書十年入石川縣師範学校自十二年至十四年就京師医武藤勇軒学二十五年航於本道為札幌郡藤古郷学之師三十年到此里自茲啓蒙為己後以村吏子自居焉三十二年官起而命東小学校教職此歲又命茂世丑小学校教職時當二校之創始於是乎物不備事難整故其於經理於施設具嘗難苦矣三十四年復任東小学校教職准于訓導其在東校前後六星霜也三十九年更任山葵澤教育所教職居数旬罹疾無幾病華此年十一月十五日終歿享年四十五葬於由良丘真宗權律師釋照憲諡曰浄正先生資性沈毅好尚古又精生理依其興教養興薰陶修身成業者豈啻数百人而已乎皆謂善良之師洵如今教育者軌範也追懷不能止嗟可以聊夫先生有一女名香人某氏子配為後頃日里人相図建碑空知支庁長正七位高橋傳吉君書與古木先生碑五字刻上頭者是成而需予文乃據先生經歷之状家系之所聞詩之

明治四十年丁未夏七月

宮島 頼平 撰  
常本 照憲 書



## 栗部地区

### 報恩寺境内

### 近藤金次郎忠魂碑

#### 碑文

故陸軍歩兵一等卒勲八等近藤金次郎君ハ尾張ノ人資性温厚明治十年五月当部落内移住開拓ニ従事ス偶々日露戦役ニ際シ君従軍各所ニ転戦功アリ遂ニ 奉天ノ役刻家窩棚付近ニ名誉ノ戦死ヲ遂グ時ニ三十八年三月六日年三十爰ニ有志相図其戦功ヲ永遠ニ伝フ



### 栗部神社境内

### 栗部開拓九十年記念碑

### 『開拓之碑』

#### 碑文

明治二十六年五月 坂東喜助外六名が個人貸下げを受け人跡未踏の大地 栗部の里に開拓の鋏降ろす 千古不拔の原始林に風雪炎暑の大自然と戦いつつ 成墾の使命を果たすに人集まって星霜此処に九十年を閲し 艱難辛苦の大業遂げて よく美圃豊饒の地となす 顧うに開墾の成果は和を以てした住民組合の設立 子女青年の教育向上に力とめ信仰と協同の精神により促





進される 慈雨を集めて流れる幌向川も時として 水魔と化し奔流泥海 万物一瞬にして潰滅の惨禍を呈するも其の都度 天の試練と将来の大成嚮導の治水に心血を注ぐ 栗沢 北海両土功組合により一円美田の園と化し 今日農業構造改善により区画整然の良圃をみるは 農業近代化の先駆なり堅忍不拔の志と協同一致の力は更に産業の振興に消防組織創設による治安維持等 郷土発展の礎を成す 昭和十六年行政区画が整正されるや 栗部連合部落会設立 自治の確立を示す 茲に開基九十年を迎え 吾等更に永安楽土の建設に邁進せんと誓う時 数多き先人の偉業を偲び 感無量なり 現在の繁栄に奉謝し聊か来歴の一端を記し 以て後世に伝えんとして之の碑を建立するものなり

昭和五十七年八月

栗部九十年記念

北海道知事 堂垣内 尚 弘 書

## 由良地区

由良地区集会所敷地内

### 開基八十周年記念塔

#### 碑 文

明治二十七年香川県の人熊野茂七、川原一郎、兼崎某らが国道沿いの由良の地区内に三万坪の土地の貸下げを受けて入地千古斧を知らない密林に開拓の鋤を打ち下ろしたのが由良開拓の礎石である。由良の名はこれら開拓者達の郷里香川県綾上村の字名由良をそのまま名づけたという。日清両国の間に戦雲が流れそめた年であったという事も奇しき縁であったろう苦闘幾十年筆舌に尽し難い苦難を経て今開基八十周年を迎える。先人達の苦勞を偲んで永くこれを後世に伝えようとして部落民一同相諮って開基八十周年記念塔を建つ。当時のうっそうたる原始林に代わって黄金波打つ今日の由良の風景を眺めて感慨の深いものは吾が人だけではない。謹んで先人に感謝の誠を捧げて拙ない撰文とする。

昭和四十八年九月二十三日

北海道知事 堂垣内 尚 弘 書

開基八十周年実行委員会



## 由良溜池畔

### 由良溜池竣功五十周年記念碑

#### 碑 文

開拓五十年余今ダ此ノ地水不足ニテ米作意ノママナラズ此ノ地ノ住民ノ切ナル願望ニヨリ溜池組合ヲ結成千古不斧ノ此ノ地二十年余ノ歲月ト組合一同ノ強イ團結ニヨリ不屈ノ精神ト労苦ガ実リ大正八年十月完成ヲ見ル造田面積二十九ヘクタールニ及ビ今日ニ至ル顧リ見ルニ五十年コノ間幾度カ干害不作ニ遇ウモ天地ノ恵ミニヨリ深山幽水ノ池坦々ト地ヲ潤シ豊饒ノ幾歲月ヲ思ヒ先人ノ労苦ヲ偲ビ之ノ碑ヲ建テ永遠ノ榮光ヲ祈ル

昭和四十三年九月二日 建立



由良溜池畔

由良池竣功記念碑



由良溜池畔

由良溜池水神宮



由良第一揚水機場敷地内

由良水神宮之碑



由良神社境内 由良第一揚水機

碑 文

水は高きところより低きところに流れるの理によれば、石狩平野を眼下に眺めるこの高台地は永久に水田は望めなかった。然るに先覚者の英知により発想の転換がなされ揚水機による三段揚げによって昭和三十五年より三百五十二・七ヘクタールが造田され黄金波打つ美田となり農業経営が安定した。爾來三十年を経て揚水機もその任を終えるに至り、ここにその労を謝し永く保存するものである。

平成元年九月

北海土地改良区由良揚水機支線組合



由良神社境内

由良開基100年記念碑

碑 文

明治二十七年香川県人熊野茂七氏等が各三万坪の貸下げを受けたのが由良入植の始まり。その後二十二戸が入植、千古不拔の原始林に酷寒炎暑・困苦欠乏と闘いつつ成墾の使命に燃え開拓の鋤を下し、此処に星霜百年を閲す。由良の地名は開拓者の郷里香川県綾歌郡綾上村字由良から名付けられた。苦闘幾十年筆舌の艱難辛苦を経て大業を成し遂げ、黄金波打つ美圃の地と成す。顧うに開墾の

成果を礎に丘陵地の畑作から有畜・水田化へと変遷、有数の穀倉を誇るに至る。信仰精神による堅忍不拔の志と協同一致の力は、更に産業の振興を成し大成嚮導に心血を注ぐ。茲に開基百年を迎え永安楽土の建設に邁進せんと誓う時、先人の偉業を偲び感慨無量なるを覚える。現在の繁栄に謹んで奉謝し、以って後世に伝えんとこの碑を建立する。

平成五年十一月六日

国務大臣 北海道開発庁長官 北 修 二 書  
由良開基百年記念事業実行委員会





## 由良神社境内

### 北海土地改良区由良支線組合記念碑

渺々たる石狩平野を西に望む栗沢の丘陵由良地区三百五十余町歩の開墾が実現した由良は明治二十七年四国から移住した熊野茂七川原一郎等二十三名の人達により熊の棲む原始林から開畑された由良の名はこの人達の郷里香川県綾歌郡綾上村の字名である尔来六十余年畑作が続けられたが近年地力の減耗甚しく営農の危機に瀕した然るに天佑があった即ち桂沢ダムを水源とする総合美唄地区国営土地改良事業の計画に当たり由良を田化せんとする百二十戸関係農民の熾烈なる悲願が容れられ標高十八米乃至七十米の波状の高地は三段の揚水により荒廢寸前から年間一万石の良米を産する美田と化したのである事業は国営と団体営と区分第一第二揚水機場を含む



北海幹線を起点とする由良幹線は国営として北海道開発局札幌開発建設部が昭和三十四年着工工費七千五百五十万円をもって三十五年完工由良幹線より分岐する第一支線第二揚水機に接続する第二支線同支線から三段揚水を行う揚水機二ヶ所及び区劃整理等は団体営として北海土地改良区が昭和三十四年着工第一第二支線及び揚水機二ヶ所は工費二千三百三十余万円をもって三十六年に区劃整理は工費八千六百二十余万円を投じ三十七年完工した国営団体営合計総工費は一億八千二百余万円これに桂沢ダム市来知及び北海幹線等の間接工費を合すれば実に三億六千二百余万円の巨額に上る將に大事業と云うべきであるこれを克く成し得た所以のものは農林大蔵両省北海道開発庁北海道等関係官庁の英断と北海土地改良区栗沢農業協同組合を中心に団結した関係農民の不変の熱意と融和であった特に当時衆議院議員として事業実現に尽瘁された小平忠氏の名を逸してはならない開田竣工に当り沿革及び事業の梗概と功績者の名を録し記念碑を建て永く後代に伝える

昭和三十八年九月 建立

小平 忠 題額

桑村三吾 撰文

阿部海秋 書丹

## 最上地区

### 最上488番地1

#### 小林米三郎翁顕彰之碑

##### 碑文

当農場は明治二十七年伯爵松平基則氏が最上から栗丘に及ぶ国道沿いに東側の国有林未開地の払い下げを受け、小作人を入れて開墾を実施し、明治四十年一月、内四百八十町歩に及ぶ土地が故小林米三郎の所有となる。故小林翁は深く農場の開発に心を砕かれ、冷災害打続き小作料の減免しばしばなりしに拘らず多額の私財を投じて、田畑の土地改良を積極的に推進せらる。また戦後農地改革に際し、欣然率先吾らを自作農たらしめ賜れる。お陰を以てかつての不毛の原野、山林



も今や化して一望穰々の美田、農土たり此れ偏に故小林翁の高徳厚恩にまたざるはなく吾々の感銘此に過ぐるものなし、爾来風雪試練の幾星霜を経て黄金波打つ広漠たる美田の沃野はもとより環境整備が進むにつれて近代住宅も建ち並び内陸型の工業も軒をつらね更に農場の中央部にはわ

が国最大規模を誇る身体障害者総合厚生援護施設道立福祉村が開村するなど故小林翁の意志が着々と進行し、農場の面影も時代の推移と共に様相大きく変貌す。依って吾ら向後ますます農作物の増産改良を企り工業の振興と併せて社会福祉の充実に努め以て故人の志を伸張し、その高恩に報いん事を決意し茲に此碑を建つ

昭和五十五年六月二十五日

北海道知事 堂垣内 尚弘 書

小林米三郎翁顕彰之碑建立発起人代表 大 竹 寛

## くじら山頂上

### 栗沢町開基百年記念塔

栗沢町は、明治25年2月4日に、当時の岩見沢村から分村して、栗沢村が誕生し、以来100年間先人達のたゆまぬ努力に支えられて、今日の輝かしい発展を遂げてまいりました。ここに、開基100年を記念し、ふるさとの見える丘（通称「くじら山」の頂上、標高110m）に栗沢Ⅱ世紀への飛躍を誓った町民総意のシンボルとして、記念塔を建設しました。平成4年11月

栗沢町長 山田 晃 睦



## 加茂川地区

### 加茂川貯水池堰堤

#### 溜池水神宮

小西農場では、明治二十八年加茂川の水を利用して水稻をしたと同年の「北海毎日新聞」に書かれているが、大正初年頃から加茂川下流流域の字加茂川、字小西の住民で、この水を利用して水稻栽培するものが増加した。しかし、自然流では、夏季に水量が減少するので、溜池築造の必要に迫られ、大正十一年字小西、字加茂川の関係住民二十二名によって加茂川用水組合が設立され、請負契約によって加茂川の上流に総面積四町一反余、保水面積三町八反九畝の貯水池がつくられた。その総工事費は約二万円を要した。組合員は当時字加茂川の住民より字小西の住民の方が多かったが昭和五年北海土功組合のかんがい溝が完成するにいたって、字小西の組合員は此れに加入したため、現在は大部分が字加茂川の住民である。昭和五十一年北海道営による老朽溜池工事が行われ、昭和五十五年十月竣功、貯水量二十五万六千立方米、堤長一〇九・五米、堤高一四・九五米、総工事費二億五千万円で完成した。

溜池右岸に水神宮が祭られている。

昭和三年八月 建立





## 栗丘地区

### 旧栗沢土地改良区栗丘頭首工

#### 栗丘頭首工水神宮

旧頭首工は、現在地より約五百米下流に明治四十四年に築造、数度に亘る災害に遭遇し、維持管理に多大な労苦を味わいまた毎年の用水不足に悩んでいたが、昭和二十八年総合大夕張地区国営かんがい排水事業が着工され、現頭首工が昭和三十四年完成された。提長七十九・二米 提高三・六米取水量五・三七一立方メートル毎秒 工事費二億一千八百四十三万円



## 小西地区

### 小西八幡神社境内

#### 小西報徳社五十周年

##### 小西土地総記念碑

##### 『無尽蔵』

##### 碑文

明治二十六年、香川県の小西和氏は北門開拓の大志を抱き多数の同志と共に移住、千古の密林の寒暑、困苦に耐え、不拔の精神で開拓した。昭和始め経済恐慌下、うち続く冷害凶作に見舞われ窮迫の星霜が続いた。ときの指導者はこの窮乏を打開するため、二宮尊徳先生の遺法「報徳仕法」の実践を住民と合意し、昭和十四年二月十一日小西報徳社を結成した。爾来今日まで至誠、勤労、分度、推譲の報徳四綱領を社員家族一同が実践し続け、今日の明るく豊かな小西がある。昭和四十六年経済の高度成長に伴い、農業の近代化、生産性の向上など農業経営安定のため土地基盤整備が行われた。受益戸数四十五戸面積二百七十ha、事業費七億七千六百万円で昭和五十年に完成した。更にその効率化のため昭和五十九年に土地改良総合整備事業を実施受益戸数四十五戸面積二百七十四ha、事業費八億千百万円で天地の恵みを無尽蔵に享受できる基盤が完成した。事業実施にあたり関係者の指導援助、住民の理解と熱意に深く感謝し、報徳社創立五十周年にあたり先駆者の労苦を偲び永安楽土の建設に意を注ぎ使命達成を誓い記念碑にその事実を刻し後世に伝える。

天つ日の 恵みつみおし 無尽蔵

鎌でほりだせ 鎌でかりとれ

床鍋 繁則 謹書

昭和六十四年二月（平成元年） 建立

小西報徳社 小西土地総期成会



## 小西八幡神社境内

### 小西部落開拓五十周年記念碑

#### 『開拓碑』

##### 碑文

小西部落ノ開創ハ、明治二十六年香川縣人小西和氏未開地二百七十町歩ノ貸下ヲ得、郷里ヨリ多数ノ移住者ヲ誘導入地開墾ニ着手ス當時千古不拔ノ曠野熊鹿狐狸ノ巢窟タリシガ、氏ノ慰撫激励ニ移住民ハ困苦缺乏ニ耐エ酷寒炎暑ト闘ヒ畑地ニ成墾ス。明治三十九年自作農開放後、栗沢北海両土功組合設立ニ依リ、部落機関ヲ整備ス、大正三年以来備荒貯蓄ヲ励行シ、經濟力強化精神作興風紀ノ改善、産業ノ振興勤勞ノ力行ニ励ミテ、和協一致ノ成果ハ、部落今日ノ發展ヲ見ルニ至ル。昭和五年電動力ノ架設ニ依リ農村文化ノ恩恵ニ浴ス。昭和十四年二月報徳社ヲ結成シ、部落ノ運営ハ報徳道ニ則リ、道德經濟ノ一體化ヲ計リ永安樂土ノ建設ニ邁進ス。顧フニ本道開拓ニ垂レサセ給ヒシ、聖慮ヲ奉體シ草創開墾ニ苦心經濟セラレタル父祖先輩ノ効績ニ、報恩感謝ノ誠衷ヲ表シ之ヲ永久ニ護ズ茲ニ開基五十周年ヲ記念シ、來歴ノ一端ヲ勒シ以テ後昆ニ傳フルモノナリ。



昭和十八年十二月八日 紀元二千六百三年 建之  
小西報徳社 曉雲 謹書

## 小西八幡神社境内

### 小西開基百年記念碑

#### 『和郷永遠』

##### 碑文

明治二十六年春、香川県長尾町の小西和氏は開拓の大志を抱き同志と共に幾多の自然の猛威と戦い慄然一体となって粗衣粗食に耐え開墾の鋤を入れてより百年の歳月が流れた。今は田園整然として歴史を映じ、水又切々として郷土を語る我が小西の人々は丸く纏まり互いに和み、稲穂がしなやかに垂れ下がるが如く「和」の心を大切にし、住み馴れし郷土を愛し共に相互扶助の精神を堅持し、豊かな稔り多い大地を永遠に継承し更に発展することを願い、先人の労苦を偲び感謝すると共にその功績を讃え、新たなる二世紀に向かって飛躍せんことを誓い、記念碑を建て後世に伝える。

平成五年十一月

小西開基百年記念事業実行委員会  
小西 欣弥 書





小西地区南14線東7号

## 部落開祖小西翁屋敷跡の碑

昭和十五年六月 建立

報徳社



## 岐阜地区

岐阜地区集会所地先

### 岐阜開基百年記念碑

#### 『温故知新』

##### 碑文

岐阜の開拓は、明治二十三年岐阜殖民社、美濃開墾、後藤開墾の開拓から創始する。岐阜殖民社農場は、岐阜県人大野亀三郎、脇田静三両氏により、当時の北海道長官永山武四郎氏に面接一三八万三五〇〇坪（四六一町）の貸下を申請、翌年認可を受ける。又美濃開墾は、殖民社農場創始者大野亀三郎と、岐阜県人小川彦三郎の両氏により始まる。夕張川沿岸の六八万七〇〇〇坪（二二九町）の貸下を受け始まる。そして後藤開墾は札幌の人後藤米七氏が二十万坪（六七町）の貸下を受けて小作人を入れ開墾に着手したのが始まりである。爾来この三つの農場の開拓も活発に行われ、昭和十五年この年正式に合併し岐阜となる。その間千辛万苦決死の奮闘を以て開墾し、美田肥沃の圃場の根源を築き、戦中戦後の困難な時代を乗り越え、開拓者魂を継承し、昭和二十三年自作農創設特別措置法により、耕作者に農地の譲渡をされる。又昭和四十四年度に入り基盤整備事業が導入され、従来の水田が区画整理され一枚三反歩或は五反歩という大型の然も整然とした美田となる。そして昭和六十三年道営土地総合整備事業の導入により浅暗渠事業が開始され現在進行中でありその面積二百四十町歩余である。思えば開拓以来百年、ここに記念碑を建立するに当たり先人の功績を讃えその意志を後世に伝え共に精進し二世紀に向かって飛躍せんとする事を決意する次第であります。



栗沢町長 山田 晃 陸 書

平成二年十一月十八日

岐阜開基百年記念協賛会会長 有 沢 邦 晴

## 岐阜西神社境内

### 開拓記念碑

昭和十二年 元岐阜殖民社農場住民によって建立された。

高井 幸次郎 選書



### 浅野太平治之碑

明治四十四年五月 開拓功労記念碑として建設

美濃州東海承天応需 書



## 越前地区

### 越前神社境内

### 越前開基百年記念碑

### 『百越前進』

#### 碑文

明治二十九年、福井県人、桜井関右衛門、山上文七両氏が入植開墾に着手したのが越前の始まりであり、続いて明治三十一年から三十三年にかけ、西田庄次、堂本文太郎両氏等十数戸が相次いで入植、土地の貸下げを受けて開拓に精励し、明治三十五年には十六戸七十五人が定住し地域の基礎を作った。地域の土地は、南十一、南十二線の一部を除き殆どが地力の乏しい泥炭地であり土地改良が文字通り地域の主事業であり歴史でもあった。開拓以来畑作物を栽培していたが念願の米作りは大正八年、南七線の一部で行われたが土質柄病害を受け一頓挫したが昭和十三年に再び造田に着手、以後技術の進歩、品種の改良等で今日の美田良圃を得るに至った。この間土地改良は、暗渠排水はもとより客土事業は馬搬、送泥、軌道、圃場整備事業の実施で他地域に類を見ない事業量と多くの資金と労力を費やした。ここに星霜百年、私どもの父祖先人は、大自然の試練や多くの艱難辛苦に耐えながら未来の幸福と繁栄を求めて心血を注いで努力されたが、その苦勞と業績に深甚なる敬意と感謝の誠を捧げると共に、私どもは開拓者精神を継承し、地域の振興発展に努力することを誓うものである。越前開基百年にあたり、先人の功績を讃え、これを後世に伝え地域二世紀に向かって更なる飛躍を決意しこの碑を建立する。

平成七年九月十日

越前開基百年記念協賛会





## 越前神社境内

### 道営土地改良総合整備事業

#### 越前地区竣功記念碑

#### 『 堅 忍 邁 進 』

##### 碑 文

当地域は、昭和十三年に本格的な造田に着手して以来、国営、道営団体営等による土地改良事業を実施し生産基盤の整備がなされてきた。しかし、長期に及ぶ転作、新食糧法の施行などから水田の汎用化、高度利用による農業の振興を図らなければならない状況の中で、暗渠排水、用排水路施設は、過去の整備から長い年月を経て機能低下を招き、営農上支障を来していることから再整備が急務とされ、平成四年三月に事業促進期成会を設立、平成六年度より道営土地改良総合整備事業として着手の運びとなった。翌平成七年度には、道営担い手育成基盤整備事業の創設に伴いこれに移行し、更に平成八年度からは道が負担軽減対象として二十一世紀高生産基盤整備促進特別対策事業（パワーアップ事業）を平成十二年度までの五年間実施することとなり、農家負担の軽減がより一層図られる結果となった。また、平成十二年度は、国の制度改正により再び道営土地改良総合整備事業として実施し、実施受益戸数六十三戸、面積四百六十一・七ヘクタール、総事業費二十一億五千五百万円を投じ、七年に及ぶ事業の完成を見るに至ったのである。農業を取り巻く情勢が大変厳しい中で、この事業実施に当たり各行政機関と各農業団体のご指導、ご協力、そして地区役員、受益者の理解と熱意に深く感謝すると共に先駆者の労苦を偲び、地域の更なる発展を願い記念碑に其の事実を記し後世に永く伝える。

平成十二年十一月建立

越前地区土地改良総合整備事業促進期成会



## 北 斗 地 区

### 南三線東一号道路沿

#### 清真布川防水門竣工記念碑

北斗町会は、土質の軟弱性その他悪条件等で、開拓以来水害に悩まされていた。この防水門の建設は栗沢町における最初の治水の大事業で、その苦労は並大抵ではなかった。昭和九年二月起工、同年八月竣工。これが今日の水郷の守護神、清真布川防水門である。

##### 碑 文

清真布川防水門大正十三年所築、昭和六年因水害決壊仍更設計為耐久構造、昭和九年二月起工、同年八月竣工、工費四万余円恵沢及千余町歩、於是住民得免災厄安生業矣、乃勒石為記念焉



## 豊栄神社境内

### 神社創祀百年記念碑

#### 『創祀百年』

##### 碑文

北海道開拓の雄図を抱いての前途は、樹林鬱蒼として昼尚暗く加えて大自然の気候風土の災いによる辛苦は今日想像の及ばざるものあり、不撓不屈の精神力と悠久の大道たる、敬神崇祖を柱として守護神を建立、これを崇敬し日々の安らぎと氏子永遠の繁栄安堵を願う幌向川沿岸住民の気運が高まり、明治二十五年山田勢太郎氏より北斗式参参番

地三反歩を神社用地として寄進を受け小祀を建立、御神体を奉持し舟により幌向川を遡り遷産し祭りを斎行したと伝う。爾来氏子祭を受け継ぎ本年創祀百年を迎う、此の間神殿並に拝殿の数度に亘る増改築更に昭和四十八年九月十五日神明造りにより御造営の竣工に至る。時代の変遷と共に氏子もまた増減を余儀なくされ今日に至るも、神明の御加護と先人の偉大なる崇高の精神をして今日あるを想起し、次の世代に永く継承されん事を銘記し、ここに創祀百年の佳き年とする鎮守豊栄神社の記念事業として奉献する。



平成三年十月五日 奉祀百年大祭斎行の日  
豊栄神社創祀百年記念事業奉賛会  
栗沢町長 山田 晃 睦 書

## 北斗地区 西地区文化センター敷地内

### 吉村与三開拓記念碑

明治三十一年、旧北斗小学校付近に入植し開拓した部落開拓の功労者である。多年、村会議員、部長その他公職を帯び、至誠一貫公共の事に従い、温厚篤実住民の代表となり、教育の振興そのた村治に貢献するところ大であり、又、農事改良に意を尽くし精農者として範を示す等、その功績顕著である。清真布川防水門の建設に執念をもやし遂に実現する。昭和十三年、生前の功を称えて貝田村長が碑文を贈った。

##### 碑文

明治三十一年四月石川縣渡道此地定居以就開拓之業爾来年歲雖水災遭遇不飜素志所有耐因若 乏勤苦四十餘星霜不斷之努力能今日之化美田良圃則主於成功而為立子孫永安之基司謂勤功蓋大也昭和十三年七月十九日得病没行年七十二嫡子甚作其遺業欲傳後昆建之



昭和十四年八月  
栗沢村長 貝田 保 治 撰書



## 茂世丑地区

茂世丑備後神社境内

### 村上宗一謝恩碑

#### 『謝恩碑』

村上宗一氏は広島県備後の国沼隈百島の人であり、明治二十四年一月以来北海道に渡航し、実地の開墾に従い、また各地の原野をくまなく歩いて、地勢、土壌、土質の一切を研究了知した。明治二十八年二月、氏の提唱により、五十九戸の団体を組織し、モセウシの土地九十万坪の貸下げを受けて団体移住しました。移住の動機及び団体長であった氏の人となりは碑文に刻まれている。



#### 碑文

謝恩碑は何の為にして建つるや茂世丑部落備後団体の居民が村上宗一君の恩を懐ひてなり君は備後の国沼隈百島村の人明治三年一月東都に遊び文学博士加藤弘之翁の門に寓す 時に政府北海道の開拓を急として奨励頗る努む 而も邦人の退守に為せる之に依じて起つ者甚だ稀なり 君慨然身を挺して此に当るの志あり 之を加藤翁に謀る 翁固君か志節を堅として又其の企画を壮とす因て之を贊助す君之単身北海道に至り深林広野の間を跋涉してその実境を験し大いに農耕の興すべきをみとめたり因て謂らく我が郷地隘く人多く窮乏年に加わり終歳營々として耕漁を事とするも以て一家数口を養うに足らず顔采色を帯ぶる者往々にして是なり 今此の輩をして此に移住し開拓の業に就かしめば上は国本の培養に資し下は家道の豊富を致す洵に一举兩得の策なりと乃意を決して郷に帰り日夕奔走北海道開墾の重要なるを唱導す熱意の溢るる所之を賛するもの漸く加わり相従わんことを請うもの五十有九戸に及べり 是に於てか君其団体を組織し規約を設けて之を結束す 其要人相励まし相助くるを以て本旨と為す 明治二十八年五月第一次移住民を率いて至り地を石狩国岩見沢村を距る南方二里の深林中に相し官允を得て之を移住地と定め木を伐り路を通じ開墾耕作の指導を為す 其の間辛酸具に至り移住民中往々之に勝えざらんとするものなきに非ず 而も君が熱誠なる精神と勇敢なる努力とは能く薄志の従をして興起する所あらしめ為に二次三次の移住者をして意を安して渡来せしめ漸次を進めて所期の効果を収ることを得たり我が茂世丑部落備後団体は即ち其の地にして今や戸数七十有余耕地四百有余町を有し民勤め地腴え風俗敦厚貧富相和し強弱相親しみ其の成績の優良なる開墾団体中稀に見る所と称せられる亦盛なりと謂うべし 而して其能く此に至る所以のもの君が賜にあらずして何そや居民其の恩を懐い碑を建てて之を記し以て後世子孫に伝えんとする豈偶然ならんや

大正七年九月

加藤 晴比古 撰

従二位勲一等男爵 九鬼 隆一 篆額

## 茂世丑公園

### 道営圃場整備事業竣工記念碑

#### 『 恵 水 豊 饒 』

##### 碑 文

本地域は、栗沢町の東部に位置する丘陵地で明治26年頃より先人たちがこの地に開墾の鋤を下ろしてから百年有余。厳しい風雪と幾多の災害と闘い自然の猛威の中不屈の精神で営々農業に励んできた。明治後期早くも水稻栽培に着目し、大正後期には各溪流を堰き止め溜池を築造すべく各水源毎に土功組合並びに水利組合が組織され開田が進み、その後戦後の食料増産時代昭和三十年代より天水を利用した皿溜による造田が相次ぎ約5百ヶ所に及ぶ皿溜が築造された。しかし用水量は不安定であり幾度となく干ばつ冷害の被害を受けていた。この慢性的な用水不足を解消すべく昭和四十七年幌向川地区国営かんがい排水事業が着工関連事業として末端用排水路、農道、暗渠排水等の整備を目的として昭和五十四年幌向川左岸地区事業促進期成会が発足、事業申請主体に現東栗沢土地改良区、換地事業受託団体に栗沢町農業協同組合、各土地改良区により構成されている栗沢町農業近代化事務所が中心となり推進され本地域を三地区に分け各地区に推進委員会を設置、昭和五十八年より宮村地区、上幌地区、茂世丑地区と順次道営圃場整備事業として着工、三地区総事業費八十八億円余に及ぶ巨額が投じられ十五年の歳月を経て事業の完成を見るに至った。この間各行政機関のご指導、各農業団体のご協力そして地区役員、受益者の労苦と偉業を後世に伝えると共に地域の発展を願い竣工を記念してこの碑を建立する。

平成七年十一月吉日 建立

栗沢町長 山田 晃 睦 謹書



## 茂世丑公園

### 茂世丑開基百年記念碑

#### 『 百 茂 知 新 』

##### 碑 文

明治二十八年広島県備後の国、村上宗一氏を団長とする五十九戸、翌二十九年徳島県阿波の国、富塚鶴太郎氏外二十戸、同三十四年には鈴木米三郎、柳橋友三郎両氏の共同で三十九戸の先人により、人跡未踏の地に開拓の鋤が入れられて以来、風雪に耐えて此処に星霜百年を迎えるに至った。父祖先人の辛苦は想像を絶し、筆舌に尽くし難いが強固な信念と相互救護により子々孫々の幸せと繁栄を希求し、冷災害等厳しい大自然の試練と幾多の苦難を克服して、今日の郷土茂世丑が築かれた。この輝かしい記念すべき年にあたり、先人の偉大な功績を讃えると共に、その労苦を偲び、報徳感謝の誠を捧げて強靱なる開拓精神を継承するため、今日生きる我々は、これを茂世丑二世紀へ伝承すべき責務を自覚して、





自らの進展を期すべく、日々励まなければならぬ。茲に千古不易なる開拓精神に思いを馳せ開基百年の命脈を絶やすことなく後世に伝えると共に、郷土の更なる発展を祈念してこの碑を建立する。

平成七年八月二十六日

勲一等旭日大綬章親授 衆議院永年在職議員 小平 忠 書  
茂世丑開基百年祈念事業実行委員会

## 茂世丑公園

### 侍従御差遣記念碑

昭和十一年十月御使岡部侍従ヲ栗沢村処女会茂世丑支部ニ御差遣アラセラル仍テ碑ヲ建テ之ヲ祈念ス

昭和十二年十月五日 栗沢村茂世丑部落民一同  
空知支廳長 従六位勲六等 永山 政能 書



## 上幌地区

### 上幌地区集会所敷地内

### 上幌百年記念碑

### 『風雪友愛』

#### 碑文

明治二十六年徳島県人板東勘五郎、浅井峯太郎、宇野為五郎の三氏が、百七十万坪の貸下げを受け、同二十九年三月、三十数戸が入植人跡未踏の大地、上幌の里に開拓の鋤を下ろす。同二十八年九月札幌の人米沢理作氏が、幌向川沿いのワラビの沢に十万坪、同二十八年徳島県人中谷宇吉氏が二十八万坪、更に富山団体が堀常蔵氏を団長として同二十八年一月、十万坪の団体貸下げを受け、翌二十九年十九戸が、ワサビの沢に入植、千古不拔の原始林の開墾に着手したのが板東農場、米沢農場、中宇農場の始まりなり。顧うに人力と馬耕の開拓から明治以来四代に亙り風雪炎暑の大自然と戦いつつ、上幌繁栄の礎を築いた代々先人の偉業を回顧する時感無量のものがある。星霜茲に百年を迎え、現在の繁栄を奉謝し、伝統の精神を継承すると共に、後世に來歴を伝えんとして記念碑を建立する。

平成八年八月十一日



栗沢町長 山田 晃 睦 謹書  
上幌開基百年記念事業実行委員会

## 上幌神社境内

### 織田与七頌徳碑 『頌徳』

上幌地区の開拓当時の苦労は移住者齊しく覚悟していたところでまた良く耐えてきましたが、予期せぬ災害は部落民に塗炭の苦しみを与えました。その第一は明治三十一年の大水害によって収穫皆無になった地域の者は食糧にも窮しました。

第二は大正二年の凶作であり、その被害はあまりにも大きく悲惨でありました。この大正初期の困窮時に直面して、明治三十一年四月広島県より移住した織田与七氏は、産業組合、土功組合の設立、学校の建設をはじめ部落の開発に貢献した氏の功績を称え、昭和十一年八月上幌土功組合員四十七名によってその頌徳碑が建てられました。



#### 碑文

織田与七翁ハ明治元年七月二十八日広島県芦品郡宜山村ノ商家ニ生レ同三十一年四月栗沢村上幌ニ移住シ商業ノ傍ラ農業ヲ経営ス資性謹直ニシテ義侠ニ富ミ又能ク公共事業ニ盡瘁シ同三十七年四月以来第二十八組長村学務委員上幌郵便局長村常設委員村会議員ソノ他ノ公職ニ就キ常ニ衆望ヲ一身ニ集メテ誠意努力セラレ当時上幌地方ハ連年畑作ノ収穫少ク地力減耗シ農家ノ疲弊実ニ深慮ニ堪エス翁ハ之カ救済ノ策トシテ水田開発急務ナルヲ看破シ率先同志者ニ謀リ大正十一年八月上幌土功組合ヲ設立シテ千代谷川上流ニ貯水池ノ築造ヲ議決シ爾来躬親シク其要衝ニ当リ工程極メテ順調ニ翌十二年五月竣功ヲ見ルヲ得令ヤ穰タル美田百七十町歩生産著シク増加シ住民何レモ其ノ墾ニ安スルニ至ル之全ク翁カ先見ノ明ト献身ノカトニ因リ夙夜至誠一貫事業ノ完成ニ尽力セラレタル結果ニ外ナラス組合員一同ハ多年此深甚ナル恩沢ニ感激シ茲ニ碑ヲ録シ以テ其高義偉業ヲ後昆ニ伝ウト言爾

昭和十一年八月

北海道庁長官 池田清 題額

## 旧板東神社跡地

### 板東農場開拓記念碑

#### 碑文

上幌地区の開拓は、農場と団体移住によって、明治二十九年以降進められたものです。板東農場は、明治二十六年貸下げを受け同二十八年四月坂東勘五郎、浅井峰太郎、宇野為五郎の三氏は、貸下げ地の実地調査と入植準備の為一応来村し、数戸の作小屋を建てて十一月帰国し、翌二十九年三月郷里より三十数戸の小作人を連れて入地し、開墾に着手したのです。この三名の共同貸下げ地全部を総称して板東農場と呼称していましたが、板東、宇野の両氏は実際には入地せず、浅井氏一人だけが入地してこの農場の経営に当たりました。開拓記念碑は、後に部落内諸神社合併に当たり取り除かれた坂東神社境内に立てられたものです。





## 上幌中宇会館敷地内

### 中宇農場開拓記念碑

明治二十八年徳島県人中谷宇吉氏が現在の中宇の地二十八万坪、(約九十三町三反歩)の貸下げを受けて農場の経営に着手しました。農場移住者は、明治二十九年から数年間に十数戸でした。



## 宮村地区

### 宮村神社境内

### 宮村朔三翁碑

#### 碑文

翁名朔三宮村氏嘉永四年二月生於豊前國京都郡黒田村家世業農職里考称勝之助後改称清左衛門又勇平妣福井氏翁其二男也幼受学定村直種夙有拓荒立身之志明治八年上京先習茶樹栽培業十二年十一月奉職勸業局育種場研究欧米農業法十四年十月転勤紋龜製糖所專攻甘菜製糖業且修精釀造法十七年近江麻絲紡会社見創設也七月任滋賀県八等属監之翌年七月退官主掌社業効勞不尠二十一年二月見聘北海道製麻会社為建築主任勵精董督有功加之輸入亜麻奨農家植之本邦植亜麻実権與于茲矣二十三年七月被举工務課長然以素志在農二十四年九月退職直航米國視察農況遂巡遊欧州翌年五月帰朝購地於札幌及当別專心營農後又於空知郡栗澤山越郡八雲等獲原野貸付經營多年墾闢悉奏功今也所有地積算一千三百七町歩宿志始得酬矣常儆兕曹曰古語言農為農本子孫相戒銘之肝惟精惟一稼艱勉旃義方諄々諸子皆其繼箕裘恢祖業也可期而待矣今茲乙丑孟春令嗣湖一君欲中樹碑以伝家嚴行蹟於不朽微予文予乃撮其要勒貞理珉以俾後昆永矢弗緩言



大正十四年乙丑二月中澣

小川 黙 淵 撰

富山 如 洋 書

錦籬間祇候貴族院議員正四位勲二等 石井 省一郎

## 宮村地区集会所敷地内

### 宮村開基百年記念碑

#### 『拓魂の響き』

ここは、明治三十二年国有林を貸りうけた共同経営の大島農場として始まり、同四十三年宮村朔蔵が受け継ぎ宮村農場となり、各地から入植した六十二戸の人々が牧場や農耕を営み、大正時代には七十八戸になって、畑作が盛んになりました。昭和二十三年農地解放によって、宮村部落会となり、四十六戸が住まい、同三十五年頃よりブルドーザによる造田が進み、水稻が主になりました。昭和六十年から、圃場整備が始まり、同六十二年には、もち米生産団体になって、今日の美田の広がる宮村になりました。厳しい風雪や冷災害、戦争や食料難など幾多の苦難を乗り越えた先人に心から感謝し、大正五年からこの地を見守ってくれた半鐘を掲げ、平和に繁栄することを希って記念とします。

平成十年九月十二日



宮村開基百年記念事業実行委員会  
題字 栗沢町長 山田 晃 睦 謹書

## (7). 北村地域

### 北村赤川地区

トレーニングセンター地先

道営圃場整備事業5地区

#### 合同竣功記念碑

#### 『農魂興郷』

碑 文

本事業は北村に於ける道営圃場整備事業として昭和50年度(西暦1975年)より着工し其の地区数8地区総面積2,873ヘクタール総事業費289億1千万、換地事業に於ても総面積4,707ヘクタールである。此の事業推進のため空知支庁東部耕地出張所に協力す

るため地元として村が中心となり、北村に係する団体の協力を得て、北村字栄町に北村農業基盤整備本部を設立し工事実施に当り、昭和62年度(西暦1987年)を以て事業完了となりました。未だ且つない画期的大事業完成に伴い本事業の足跡を誌す各地区の記念誌並びに西暦1987





年の世情等をカプセルに納め事業完了の記念と致します。

昭和六六三年三月二七日 西暦一九八八年

北村農業基盤整備推進本部

この碑の基にはタイムカプセルが納められております。

開村120年記念日に開封し、開封日は西暦2019年6月13日です。

地区見取り図碑



中央地区期成会の碑 『農』



美唄達布地区期成会の碑 『魂』



有明地区期成会の碑 『興』



赤川2期地区期成会の碑 『郷』



赤川地区期成会の碑 『碑』



## 北村配水池敷地内

### 鳥井英一水道功勞碑

#### 建碑之弁

人類の生存に欠くべからざるものは水を以て第一とする若しそれ水清く土地豊沃風光佳ならんか即ち期せずして人々蝟集して燦爛たる文化の華を開く 北村の地膏腴で風光亦雄偉であるが水濁悪で赤川の地名をさえ存し飲料水すら不自由を感じずのみならず盛夏と厳冬の二季には渴水に悩む 鳥井英一君之を嘆き之を憂い浄水を供給して厚生を図り且つ火防に資せんとして切々たる悲願を立て水道促進期成会を組織せんとし是を村長塚本一郎に詢る村長欣然として双手を挙げて之に賛し依って力を得て此の文化施設工事完遂に邁進し竟に昭和32年12月25日待望の通水を見人々初めて透徹した水で顔を洗った実にこの日を境に文化の一線を北村の上に画した 君の悲願は彼岸に達したのである受益者相欣び相謀り君を偲ぶよすがにもがなと題字揮毫を田中北海道知事に乞い碑を建てて君の功績を不朽に伝えるものである。

昭和33年6月15日

撰文並書 林 登美彦



## 市役所支所敷地内

### 金森保太郎翁自治功勞碑

#### 碑文

翁は明治十年如月富山県婦員郡四方町に呱呱の声を挙げ明治二十六年北辺未開の宝庫開発の勃々たる雄図を抱き鬱蒼たる美唄達布に笈を卸し本村定住の基礎を固めたのは紅顔十六歳の少年時であった。爾来自治の為終始した。

明治三十七年六月一日 大正八年三月三十一日北村戸長役場総代人

大正八年五月 現在に至る北村会議員この間に於て  
昭和二十一年十一月六日 北村会議長に選任至今日  
昭和二十一年十二月二十二日 昭和二十六年七月十九日 北村農業委員会会長

昭和二十二年八月十日 昭和二十三年十一月二十九日 北村食糧調整委員会会長

昭和二十六年七月二十日 昭和二十九年七月十九日 北村農業委員会委員

翁は生涯の大部分を本村今日の育成の為に投入されたのであって連続五十二年間の自治貢献は全国に於ても稀に見る永年勤続で其の功績も亦偉大である。茲に碑に刻して以て之を頌し後昆に伝えんと然云

昭和二十九年十一月二十三日

勤勞感謝の日建立





## 市役所支所敷地内

### 開拓記念碑

#### 碑文

江辺草作褥 一夜枕東流 夏々水禽叫 悠々動客愁  
是安政四年丁巳五月十三日探検家松浦武四郎石狩川水源調査の途次ビバイヌタッフに宿りし時書き遺したる絶句なり 当時上川アイヌの宿泊地たりしに過ぎず 明治十七年四月雁来の人滝本千代吉を以って入植者の嚆矢とす 其後逐年入植者あり 越えて明治二十六年山梨県人北村雄治団体移住開拓経営をなす村名実に之に職由す 明治三十三年六月十三日岩見沢村より分村独立す 爾来五十閏年戸数一千一百七戸人口七千有余水田一千五百町歩畑二千一百町歩を算するに至る 自然景觀一変して文化景觀を現出し汪洋たる前途を象徴す 盛なる哉

題 北村 石狩長流水拍天 雲涯一抹樽前煙  
半百歳前榛莽 萬頃農功麗穗鮮



昭和二十五年六月十三日

## 市役所支所敷地内

### 松浦武四郎翁顕彰碑

#### 碑文

松浦武四郎翁諱は弘字は子重幼名は竹四郎北海と号し別に多氣志楼とも号した。文政元年寅二月六日伊勢国一志郡須川村松浦圭介の四男として生れた。筑紫松浦候の裔といわれている。津藩の塾に学んで国学及び漢籍を修めた。弱冠二十一歳の春長崎に赴いて祇性寺の僧侶となったが弘化二年蝦夷地の風雲が急であることを聞き、松前に渡り進んで西蝦夷地の太櫓や瀬田内に行ったが官の禁制嚴重で奥地へ入ることができなかったので箱館に赴き同地の商人加賀屋孫兵衛の手代となり東蝦夷地の沿岸を巡り知床に至った。翌弘化三年漁夫となり庄蔵と称した。更に医師西川從庵の従僕となり樺太勤蕃の一行に加わって西蝦夷を経て樺太に航し晩秋江差に帰った。その後三度松前に渡り国後色丹択捉の諸島を巡歴した。当事世人は翁を遇するに蝦夷氣違又は蝦夷雀の綽名を以ってした。燕雀 焉ぞ大鵬の志を知らんやである。安政二年幕府蝦夷地を直轄するに当り翁を御用雇に挙げた。安政三年五月九日石狩定役立石元三郎シノロ乙名エンリシウ外アイヌ八名と共に現中島に宿泊し雨竜越をして西蝦夷を探查した。安政四年四月蝦夷地山川地理取調場所見立新道切開等を命ぜられ石狩川を遡り五月十三日トック乙名セッカウシ外三名と共に再び中島に宿った。江辺草作褥。一夜枕東流。夏々水禽叫。悠々道客愁。と書き残している。此の行で石狩岳（大雪山）に登り石狩川水源を見定め翌潤月五月二十一日三度宿



るに蝦夷氣違又は蝦夷雀の綽名を以ってした。燕雀 焉ぞ大鵬の志を知らんやである。安政二年幕府蝦夷地を直轄するに当り翁を御用雇に挙げた。安政三年五月九日石狩定役立石元三郎シノロ乙名エンリシウ外アイヌ八名と共に現中島に宿泊し雨竜越をして西蝦夷を探查した。安政四年四月蝦夷地山川地理取調場所見立新道切開等を命ぜられ石狩川を遡り五月十三日トック乙名セッカウシ外三名と共に再び中島に宿った。江辺草作褥。一夜枕東流。夏々水禽叫。悠々道客愁。と書き残している。此の行で石狩岳（大雪山）に登り石狩川水源を見定め翌潤月五月二十一日三度宿

泊して付近を踏査し石狩に帰った。翁の足跡は遍く全道に至らざる所はない。翁は博学多識でその著書二十一類百六十一種に及んでいる。明治二十一年二月十日没した。享年七十三歳。特旨を以って従五位に叙せられた。札幌創建の献策者で道国郡名々付親由縁の地中島に標柱を建て更に開村六十年に当り此処に碑を刻みて永遠にその功績を顕彰する。

昭和三十四年九月五日

## 市役所支所敷地内

### 圃場整備北栄地区竣工記念碑

#### 碑 文

泥炭地圃場整備事業は全国で夫々の工法で施工されていたが、昭和四十年道立農業試験場に委嘱して置土方式による工法をあらゆる角度から研究した結果、次の要件を具備すれば可能であることが判明した

1. 泥炭地に於いては切土方式は避けるべきで客入土による硬盤の支持層を増大する事
2. 客入量は立地に応じて既成田の田面高第二位に合わせ算定する。
3. 均平は代掻き以前に完全に行い代掻き時は避ける。
4. 置土により増収効果は上がる。
5. 収穫期の土壤硬度は下層三十糎以下は耕起前と変わらないが、表土は排水不良となる可能性が多いので暗渠の設備を併せ行う必要がある。
6. コンバイン利用の場合走行部は軌導型とする。
7. 盛土当初は客入土と原土との混合により土壤の物理的性質が変化し易いから施肥管理作業は慎重な配慮が必要

全国で実施されている置土方式別名北村方式はこの試験により大きな成果をあげている。昭和四十一年度から道栄圃場整備事業北栄地区が事業量一千十三ヘクタール事業費七億六千万円で工事に着工し、昭和四十八年度に於いて面積一千二ヘクタールで事業費十九億二千六百万円で工事を完了した。この間米生産調整で通年施工が実施され工事は急速に進んだ。又全国初めて圃場整備事業による舗装工事が実施され地区内重要道路八千六百五十米が舗装

を完了した事は本村に於ける道路整備に大きく貢献している。事業施行に当り二百六戸の受益農家を説得し南空知最初の採択地区として実施に踏切りをつけた和田期成会長の献身的な努力と村当局及び北村農業協同組合の協力に対し深く感謝すると共に此の喜びを永く記念する為にこの碑を建てる。

昭和四十八年十月建



#### 和田孝雄氏像





## 北村北都地区

北村神社境内

### 北村黽翁頌徳碑

碑 文

翁ハ本村多年ニ互ル耕地ノ水害ヲ除カント志シ、曩ニ空知支庁管内ノ同志ト相図リ北海道土功組合ヲ創立シテ其の理事者トナリ、昭和3年以來専ら北村支線組合長トシテ治水ニ尽瘁セリ、今ヤ当地方一帯ニ壱千貳百余町歩ノ美田ヲ見ルニ至ル是実ニ翁ノ竭誠努力ニ因ル所ナリ仍テ組合全員相諮リ茲ニ碑ヲ建テ以テ其徳ヲ頌ス

昭和24年5月

頌

石狩岳高鬼峨聳天 国利民盛其徳無涯  
石狩川長汪洋注海 此翁偉業山河並存



## 北村中央地区

瀬能牧場地先

史 跡

### 松浦武四郎宿泊地記念碑

碑 文

安政三年五月九日シノロ乙名（酋長の意）  
エンリシウ外九名、安政四年五月十三日トツ  
ク乙名セッカウシ外三名、同年閏五月二十一日上川（この地より上流の意）アイヌニホン  
デ外一名とともにこの処に宿泊

昭和三十四年九月五日

為 北村六十年記念建

築堤工事のためこれより四十五米先より移設し、  
開村八十年を記念してここに石碑を以て建之する。

昭和五十四年十一月三日



## 北村美唄達布地区

諏訪神社境内

### 自作農創設記念碑

#### 碑 文

本創設地片倉農場場主片倉合名会社ハ社長貴族院議員片倉兼太郎殿副社長片倉勝衛殿ニシテ製糸王トシテ夙ニ其ノ名有リ明治三十六年本地域ニ百十三町歩ヲトシテ開拓ノ業ヲ創始ス爾来三十七星霜其ノ間屢々水害凶作ニ遭遇シ幾多ノ艱難ニ逢着シタルモ一意企業ノ進歩ト耕作者ノ生活安定ヲ図リ耕作者亦場主ノ恩恵ニ感奮シ孜々トシテ開墾耕作ニ専念シタル結果昭和十一年地内治水工事ノ完成ト相俟テ開拓ノ業全ク成リ経営ノ基礎確立スルニ至ル茲ニ於テ場主ハ農村更生ノ要請ハ自作農創設ニ在リトノ固キ信念ノ下ニ農地ノ開放ヲ決意セラレ一面村当局及関係諸氏ノ深甚ナル斡旋ニ依リ自作創設資金ノ貸付ヲ受ケタル吾等三十七名ハ父祖伝来ノ宿題漸ク達成シ茲ニ自作農タル第一歩ヲ印シ更生ノ曙光ニ浴スルヲ得タリ仍テ一同相謀リ償還組合ヲ結成シ相扶共励益々農業報国ノ赤誠ヲ捧グルノ決意ヲ固ムルト共ニ場主ノ鴻恩ヲ永ク子孫ニ肝銘セシムル為本碑ヲ建立ス



昭和十五年六月

## 美唄達布地区公民館裏手(公共用地)

### 北村分村記念碑

#### 碑 文

美唄達布の地は遠く松前時代から内陸交通路の要衝をなしていて弁財船の寄泊地でもあった。明治二十二年には白鳥千代吉の開墾地となり同三十三年六月十三日岩見沢村より分村するや此処にあった稲葉商店の階上を仮庁舎に充当して初代戸長天野剛村政を継理した。

開村六十年に当りこの由緒の地に碑を立てて長く記念する。昭和三十四年九月五日その後この場所は、河川改修の工事により、『北村分村記念碑』の標柱は撤去され、昭和五十四年十一月三日、開村八十周年記念事業の一環として現在地に建立された。





## 道道687号の旧村塚

### 美唄達布地区軌道客土工事記念

#### 『竣功碑』

##### 碑文

昭和26年5月、美唄達布地区軌道客土工事を、団体営事業として国費8割、地元負担2割を以て、第一期計画513町歩6ヶ年計画により北村字幌達布初代組合長三好鶴吉氏を代表とし、担当職員奥岡勇、地元請負により実施せり。本地区は、北村・岩見沢両市村にまたがって居るため、両市村農業協同組合区域に属し、当初北村農業協同組合の事業主体として工事実施に当る。昭和28年度工事より道営事業に移管され、随意契約により施行、地元受益者が主として之が工事の施行に当る。昭和29年度より岩見沢市西川向出口竹松次期組合長に新任、施行地域は殆ど岩見沢市農業協同組合区域に属するため、昭和31年度より岩見沢市農業協同組合が施行主体となり、昭和32年を以て第1期計画全事業を完成せり。引き続き第2期計画に着手、面積276町歩、岩見沢市西川向期成会長是広善雄が新任され、昭和36年12月第2期工事全事業量を完成せり。事業実績について、面積787町9反4畝歩、客土入量3754.98立米、総事業費1億8683万円の内、補助金1億4763万8405円、地元負担3969万1595円、受益者戸数180戸、現場使用器材12屯、スチーム機関車1台、8屯機関車2台、1.2立(方)米積土運車124台を以て、11ヶ月の長期に亘る難工事を完成、受益者全員の協力の賜である。茲に碑を建立し永久に記念する。



昭和37年11月

## 北村幌達布地域

### 幌達布ほろいちライスセンター敷地内

#### 北村土地改良区記念碑

##### 碑文

北村土地改良区は、昭和26年5月31日北新第一号を以て認可され設立した。川崎栄作選ばれて初代理事長になり期成会時代からの困難な問題を処理す。次で昭和28年四月専務理事本間兵蔵が二代理事長に就任す。石狩川本流大揚水機場を設けその大きさは千四百馬力、昭和29年度から揚水を開始、水田経営の第一歩印す。この秋大冷害凶作となり、対策陳情の為上京の途次青函連絡船洞爺丸転覆に遭難殉職す。この9月29日本間兵蔵の霊昇天す。齡47歳追悼に堪えず。昭和29年11月総代制を定め40名当選、星野秀夫三代理事長に就任し、昭和52年3月迄約23年間にわたりよくその責を果す。創立時川崎栄作・本間兵蔵・松崎竜英・河野為次郎・



高田助治・長谷川安太郎等は組合員に率先して事業を起こし、職員船本孝雄・佐久間利幹・金田秀夫らこれを援けて完遂をはかる。役員総代水利委員支線長職員一致団結の気風は実を結びかつての未懇地原野は今では10アール当たり玄米九俵平均を生産する美田となり日本の食糧基地として万全の態勢を造った。長い間の苦難と闘いながら財政も組合員の理解のもとに健全化したのである。昭和52年4月北海土地改良区と合併することになり創立26ヶ年の歴史を閉じて発展解散をする運びとなった。

昭和52年6月12日

理事長 星野秀夫 記

## 幌達布ほろいちライスセンター敷地内

### 幌達布揚水機第三号機

この唧筒は、昭和31年竣功以来、昭和56年、道営灌漑排水事業北村第二地区より新機場完成を見て、24年間の大役を終えた北村南分水区の恩機として、これを後世に残し今後の発展を祈念するものである。

幌達布揚水機場に4機設置したうちの最大口径を誇った第三号機である。



## 幌達布公共用地内

### 道営圃場整備事業幌達布北地区 ・南地区竣功記念碑

### 『拓魂農興』

#### 碑文

大地の母なる河石狩川の流域に広がる未開の原野、開拓の先人は明治二十四年幌達布の地に開墾の鋤を下してから幾星霜、厳しい風雪と寒気に堪え、度重なる洪水とも闘い、自然の猛威の中で幾多の辛酸を嘗め、不屈の精神で営々と農業に励んで来た。戦後食糧の増産の国策に呼応して、畑作農家は米作転換への願を込めて昭和二十六年北村土地改良区を設立、道営灌漑事業により開田して、泥炭地の水田に黄金の穂波を展望した。それまで農村は、打ち続く冷災害で農家経済は疲弊困憊に達していたが、米の生産で漸く安定することが出来た。昭和四十年代に入ってから、米の生産が過剰となって国では生産調整を講じ、水田の休耕と転作を実施した。我々は、この地域が最も米作に恵まれた稲作の中核地帯であることを強く認識し、将来共米作地帯として生きることにならざるが故に、良質米の生産と効率的な稲作経営の安定を目指しており、農村近代化への展望と対応に意欲を持って来た。更に、農業生産性の向上と地域農業の振興を図るべく、土地基盤整備への気運が強く盛り上がり、昭和五十三年四月幌達布南地区期成会が、





次いで九月には幌達布北地区期成会が発足し、事業申請主体に北海土地改良区がなり、圃場整備事業の促進に取り組んだ。本事業の計画樹立並びに工事施工については、昭和五十二年四月に発足した北村・北海土地改良区、岩見沢土地改良区、岩見沢幌向農業協同組合北海北村農業協同組合の五団体により構成されて居る、北村農業基盤整備推進事務所が中心となり推進された。泥炭地水田に於ける水稻栽培の確立と大型機械の導入を容易にならしめるため、圃場の整地工事では

栗沢町由良に土取場を獲得して、約七十六万立方メートルに及ぶ土量をダンプトラックで大運搬し、スクレープドーザーによる小運搬方法に依り、表土扱の客土方式で施行された。加えて幹支線、用排水路・農道等の改良整備とも相俟って、換地事業で農地利用の集団化も図られて、事業の完成を見るに至った。斯くして泥炭地の原野が整然と区画された美田に生まれ変わり、新しい農村の姿は、誠に隔世の感を深くするものである。事業では、これ迄で幾多の障害と困難を克服しながら、工事の完遂に多大の御指導と御配慮を寄せられた関係機関に深く感謝し、茲に概要を記して事業の竣功を祝い、記念碑を建立し、後世に之を伝えるものである。

昭和六十一年九月

### 道営圃場整備事業概要

#### 幌達布南地区

事業量 区画整理 359.4ha 64戸  
暗渠排水 352.0ha

事業費 36億6176万円

着工 昭和54年4月

竣功 昭和63年3月

#### 幌達布北地区

事業量 区画整理 317.9ha 59戸  
暗渠排水 313.7ha

事業費 34億6666万円

着工 昭和55年4月

竣功 昭和63年3月

## 幾春別川左岸築堤

### 水天宮柱・新水天宮碑

#### 新水天宮由来碑

平成4年幾春別川新水路事業が着手され、水天宮の位置が背割堤となり、祭事に支障を来すことから、幌達布神社総代・新水路幌達布対策協議会・地元関係者と数年に亘り協議を重ねた結果、現在の新水路左岸築堤（路側帯）に移設する事になり、関係機関の多大な御協力のもと、移設の完了を見ることができました。今後、新水路築堤に移設後も亡き犠牲者の慰霊と合わせ、新水路及び石狩川の安全を祈願する。



平成16年10月吉日

寄贈者 幌達布河川工事連絡協議会

## 幌達布神社境内 土地改良記念碑

### 碑 文

足衣食期礼節充倉藁期思榮辱意幌達布一円雖平坦泥炭卑湿而作物之生育不充分此故莫衣布於土質改良於是昭和十九年至春設立客土組合布設軌道得客入反当十立方坪以期待其効果仙際会終戦之混乱工事不進涉越昭和二十二年五月及見幌達布土功組合之設立依組合員之努力興事業終始高黒伊次郎致献身尽力賜也為闍年七箇年総工費要貳仟参拾万円由是伸民生健村政專潤延而寄与国家再建処亦大矣安著剩舌於其間哉

竣工ニ当リ組合員一同高黒伊次郎氏苦勞ニ本碑ヲ建立シ感謝ノ意ヲ表ス

昭和二十五年庚寅年

林 文



## 北村砂浜地区

幌向第3ライスセンター敷地内  
道営圃場整備事業砂浜西地区

### 竣工記念碑

### 『頌土農興』

### 碑 文

北海道開拓の初期、明治二十二年先人はこの地に開墾の鍬を打ち下した。幾多の辛酸を嘗めながら営々と農業に励み、幾星霜を経て大正十三年北海土功組合による灌漑工事が着手され、昭和四年北幹線が完成通水が始まった。畑は徐々に水田となり、黄金の稲穂が波打つ美田が眺望された。しかしこの北幹線は、泥炭地帯を盛土で施行されていたため沈下がはげしく、用水路の保全も不可能となった。昭和七年砂浜揚水機場が出来上がり、沿岸地帯は水田耕作が続けられたが、泥炭地帯は年を経ずして北幹線の廃線により、畑地還元の止むなきに至った。十数年間畑作物の低収入にあえいでいた農民も、終戦後国の食料緊急増産政策とも相俟って稲作経営の念止み難く、昭和二十六年北村土地改良区の設立を迎え、道営土地改良事業による造田かんぱい事業が進んだ。昭和三十一年、泥炭地帯にも再び黄金の波を見る事が出来た。打ち続く冷災害に困窮の極に達していた農家経営もやや安定して来たが、昭和四十年代に入り国の農業政策は転換期を迎え、水田の休耕作が要求されて来た。だが吾々はこの地が永劫不変の米の生産地であると自覚認識を深め、更に効率的な農業機械による省力化を図り、良質米の生産・水田経営の合理化と農業経営の安定を目指す近代的機械農業への転換に意欲を燃やし、その基盤確立のため圃場整備事業の気運が盛り上がり、昭和五十一年四月当期成会の発足を見た。昭和五十二年、北村土地改良区発展的解散により、北海土地改良区に合併される。尔来北村・北海土地改良区・岩見澤幌向農業協同組合等、各関係機関の協力指導の下に、重なる難関も克服し、関係者一致協力して圃場を大型にし、換地事業の完遂と相俟って灌漑排水設備の改良を加へ、並びに幹支線農道を完備、隔世の感ある圃場整備の完遂を見るに至った。又、地区内にあった岩幌客土組合所有の土取場跡地五、六ヘクタールを買収、北村役場の尽力を得、江別火力発





電所捨灰約十五万立方米を投入埋立てた。圃場整備事業の進行と共に新農業構造改善事業も併進され、この地の念願である育苗から収穫までの共同作業体系施設も出来上がった。配慮下された各関係機関に感謝し、茲に概要を記し、住民のよろこびを永く後世に伝えるものである。

昭和五十九年八月

砂浜神社境内

開村二十年記念碑



北村豊里地区

豊里神社境内 開基百年記念碑

『豊里開基百年』



『温故知新』



北村牧場地先（公共用地）

『石川啄木歌碑』と

『鹿子百合の碑』

石川啄木

石狩の空知郡の牧場の  
お嫁さんより送り来し  
バタかな。

— 悲しき玩具より —



## 碑 文

薄幸の歌人石川啄木があこがれた橘智恵（戸籍はチエ）は、北海道庁立札幌高等女学校卒業後補習科に進み、明治39（1906）年3月函館区立弥生尋常小学校訓導となった。

翌40年6月代用教員として採用された石川啄木は、智恵を「真直ぐに立てる鹿子百合」にたとえ、美しい同僚の存在に強く心ひかれるものがあった。不幸にも同年8月の函館大火によって職を失った啄木は、智恵の下宿を訪れて処女詩集『あこがれ』を贈り、札幌へと旅立っていった。

その後病を得て職を辞し、療養に専念して全快した智恵は、札幌農学校で兄の学友であった若き牧場主北村謹のもとへ嫁ぐことになり、明治43年5月石狩川を汽船で遡って、空知郡北村の北村農場牧所（後の北村牧場）に来たのであった。

啄木は、明治43年末に出版した処女歌集『一握の砂』を智恵に贈ったが、この歌集に収められた「忘れがたき人人 二」22首は、智恵を歌ったものである。

のちに「空知ホルスタインの父」とたたえられる夫と共に、多忙な毎日をおくっていた智恵は、啄木が東京で肺を患い、栄養もままならない貧困の生活をおくっていることを風の便りに聞き、当時高価で入手難だったバターを、夫の同意のもとに、歌集へのお礼の気持ちも込めて、かつての同僚に贈った。大正11（1922）年10月1日、智恵は産褥熱のため、愛する夫と6人の子を残して空知郡岩見沢町の岩見沢病院でこの世を去った。満33歳であった。私たちは、この美しいエピソードを永く後世につたえるため、この碑を建設する。

1999年10月17日

北村歌碑建設期成会

## 北村豊正地区

### 豊正神社境内

### 日野農場 『自作農創設記念碑』

#### 碑 文

日野農場主日野喜代治は、昭和10（1935）年が日野農場開設満30周年にあたることから、それを記念して昭和9（1934）年と翌昭和10（1935）年の2年間で農場の大半を開放し、自作農を創設することにした。そして、開放を終えた昭和10（1935）年9月14日、豊正神社境内に「自作農創設記念碑」を建て、昭和11（1936）年8月14日に日野農場の存在を示す「開拓碑」を建てた。



### 豊正地区公民館地先

### 道営換地事業大富北Ⅰ区記念碑

### 『翔きの塔』

#### 銘 文

朝やけに 黄金の波は こだまして  
歴史の歩みを 語りつつ 未来の夢に  
飛翔する ほこり高い 豊正の里

1985. 9

一孝 書





## 豊正神社境内

### 開拓碑

#### 碑文

日野農場ハ、先代ガ理想的農場創設ヲ劃シ、  
明治38年原野ノ貸付ヲ受ケシニ肇マリ、  
爾来苦心開墾ニ努ムルコト20年、遂ニ  
大正13年3月全地成功330余町歩ノ  
附与ヲ受ク。  
昭和10年開拓満30周年記念事業トシテ、  
農場ノ大半ヲ自作農ニ開放ス。

日野喜代治 謹書



## 豊正地区公民館地先

### 高橋宗一郎翁之像

#### 憶高橋翁

六十余年顧如夢 調禾植樹教兒童  
郷念俘見功庸偉 白雪償碑飾有終

#### 碑文

翁は富山県の産、明治27年4月19日誕生、大正14年本村に移住、水害と戦い泥炭地に挑み、客土に依る土地改良を絶叫し、遂に実って美唄・北村地区軌道客土の実現となり、1215町歩の完成を見るに至った。翁は、昭和33年極月24日中道にして没した、時に齢65。大富農協・豊正校・三日月排水・石狩川治水等を想起する時、吾人の心裏に、朴訥親しみ易く、闊達不羈の、米作王の姿が蘇ってくる。

昭和41年9月吉晨



撰文 林 登美彦

## いわみざわ農協大富支所敷地内

### 道営圃場整備事業大富

#### ・大富南地区合同記念碑

『水清く 緑豊かに 人和み  
瑞穂輝く 大富の里』

#### 碑文

我が国従来土地改良事業は、食糧増産・土地生産性を目的とし、主に客土・暗渠排水・灌漑排水を中心として実施され、大富農協地域に於いても、開拓以来先人が冷水害と戦い幾多の困難を克服し、受益地1300ha余の基礎を築いた



ものであり、その過程は如何に困難の途であったかと憶い起こすものである。時代の変遷と共に、農業をとりまく条件の変化に対応し、国の施策の方向も、労働生産性の向上、農業生産の選択的拡大、農業構造の改善に資する、近代的農業を展開するための基礎作りを目的として、昭和38年に圃場整備事業が創設された。土地改良の歴史の事実を認識理解し、それに基づいて将来を考えることは言うまでもないことであり、その後の社会情勢も国民の需要構造の変化による過剰米による生産調整等、農業環境の急変に併せ当地区に於いてもこれに対応し、健全農業確立を目指し体質の改善が叫ばれた。これを受けて、時の組合長土田年平氏等が総合的な土地改良事業である農業基盤整備は必要不可欠であることを提唱し、昭和48年11月期成会誕生の運びとなったものである。当時は未だ本事業に対する理解が薄く、交換分合や工事費負担の問題等で反対が強く、賛同者は3分の1にも満たない状態であった。爾来3ヶ月にわたり、期成会と農協の昼夜を分かたぬ戸別或いは部落別の勧誘・説得が行われ、漸く3分の2の賛同者を得た中で、昭和49年3月正式に大富地区圃場整備期成会の発足を見、推進本部長土田年平氏、期成会長武田貞光氏、事務局長氏家俊彦氏が当たり、本事業推進に努力傾注したものである。本地区は、北村豊正・美唄市西美唄・月形町新生の3市町村にまたがり、面積758ha 受益者171名であり、昭和50年度事業着工となった。時期を同じくして、水田利用再編対策と相俟って工事は夏季施工となり、昭和53年度には年間232haの整地工を実施、全国第1位を記録したこともあり、諸般の経過を経て昭和56年度には面工事の完了を見たものであるが、12年間にわたる期間と約60億円余の費用が投入され、事業の完了を見るに至ったものである。又、隣接の美唄市大曲・北村豊正10・11部落に於いても、急変する農業情勢に対応するため圃場条件整備の声が挙がり、昭和52年9月大富南地区期成会の結成を見、伊藤正次郎氏が会長として事業の推進に当たり、面積477ha、受益者106名を以って昭和55年度着工の運びとなった。真に時期適切であり、工事も換地も進捗し、工事費55億5000万円余を以って昭和60年度面工事の完了を見るに至ったものである。南地区には、実に115億円余の巨費が投入され、新しい時代に対応する基盤が確立されたものである。この間に於ける関係受益者の絶大なる努力と協力と理解があったことは言うに及ばず、農林水産省・北海道庁・空知支庁・美唄市・月形町・北村・北海土地改良区・空知大富農業協同組合等、関係機関団体の強力な支援は特筆すべきものである。いずれにせよ、先人の開拓せるこの偉大な耕地を継承し、緑豊かな農郷造り、又、食糧生産基地としての使命は重大であり、幾多の障害・苦難を超越し、未来への一大飛躍へ通ずるものと確信する。茲にこの事業の実現に最善を尽くされた事業促進期成会役員諸氏の功績を讃え更に地域の発展を願い、後世にこの偉業を伝達すべく、この碑を建立するものである。

## 北村自然体験宿泊学習館地先（公共用地）

### 道栄圃場整備事業

#### 中小屋地区竣工記念碑

#### 『豊かな農郷』

#### 碑文

入植以来幾多の困難と、度重なる冷水害の痛手を受けながら堪え偲んできた先人の苦勞に報いる為、一日も早く、この土地を緑豊かな大地にしようと、故初代





会長橋場正吉氏の血のにじむ努力と、地域役員、受益者の一丸となった協力により、昭和四十一年より六ヶ年間で道営客土事業北美地区、北美第二地区が完了され、昭和五十三年に農業の近代化と経営の安定を図ると共に良質米生産の基盤作りを目指し事業の促進を図る為に、期成会を発足した。又、同年に行政の指導もあり本地区の水利組合と北海土地改良区との合併になり、事業は北村・峰延農協・北海土地改良区の協力を受け、翌昭和五十四年に起工の運びとなった。四百三十ヘクタールの圃場と幹線農道の整備、各支線排水路の改修を始め揚水機場用水路工との完備等九ヶ年の歳月と総事業費四十六億円を投じて、この事業は見事に完成されたのである。受益者戸数六十六戸は、先輩各位の偉業を讃えると共に、事業完成に協力下された方々に深甚なる感謝の意を表すと共に、更に将来への飛躍と期待をこめて、決意を新たに、此処に事業竣工を祝い、記念碑を建立するものである。

昭和六十年七月吉日

中小屋地区道営圃場整備事業促進期成会

## 北村自然体験宿泊学習館地先（公共用地）

### 橋場正吉翁之像

#### 碑文

勲六等単光旭日章橋場正吉翁は、地方自治、開拓の父なり。  
大正二年二月二十五日栗山町角田に生まる。昭和十六年本村に入植、つとに家業に精励のかたわら、産業・福祉の伸展に意をそそぎ、北村議会議員十九年、農業委員一五年、峰延農協役員三十年を歴任、今日の基礎を築いた功績は燦然と輝く。この間造田・治水・土地改良事業の各期成会長として、特に十有余年に亘る道営客土事業に精魂を傾注、この地域経済の安定向上に貢献。又、道営圃場整備事業の期成会長として中道に没するは痛恨の極みなり。時に六十八歳、昭和五十六年十一月二十七日なり。茲に円満玲瓏、玉の如き翁の人格と徳望を敬慕する人々の志を寄せ、像を建立して永遠に伝う。千載不磨の翁の名は、日月と輝き、天地と俱に遺らん。



昭和六十年九月 吉晨

昭和五十四年十月 建立

北 村